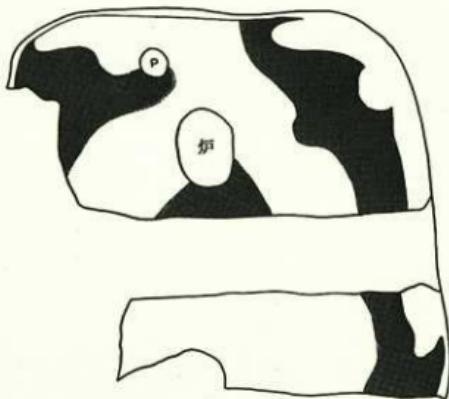
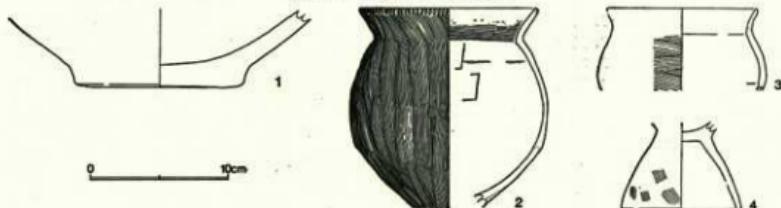


第39図 3号住居址



第40図 3号住居址床面状態図



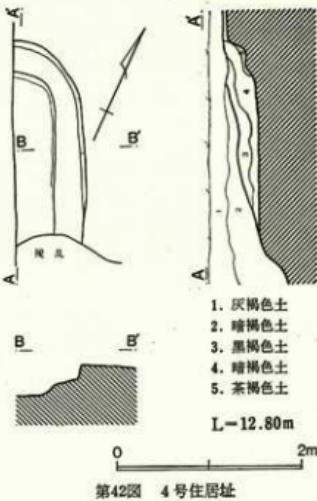
第41図 3号住居址出土遺物

#### 4号住居址（第42図）

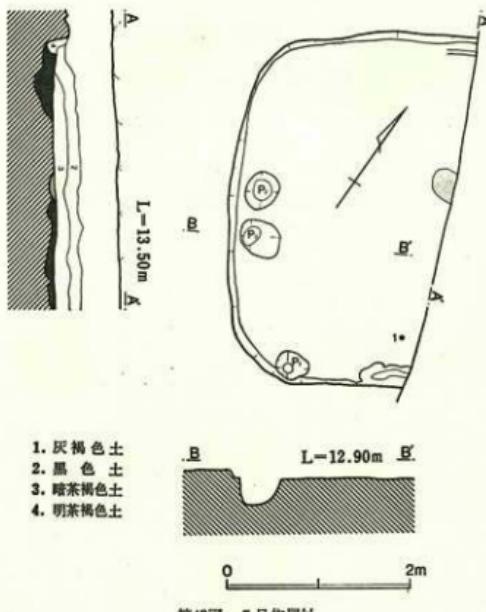
3号住居址の南西 8.5 m に位置し、発掘区域にわずかにかかって検出された。南側は3号溝によって切られている。主軸方向はほぼN-27°-Wと推定される。ローム面から床面までの深さは 20 cm 前後で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁から約 30 cm 内側で床面が緩やかな段をなし、15 cm 前後低くなる。遺物は検出されなかった。

#### 5号住居址（第43・44図）

1号住居址の南約 10 m に位置し、発掘区域東端で西半分だけ検出された。南北軸長は約 3.8 m で、隅丸方形を呈すると考えられる。南北軸方向はN-34°-W



第42図 4号住居址

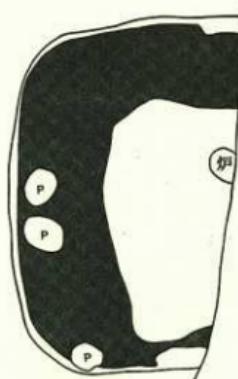


第43図 5号住居址

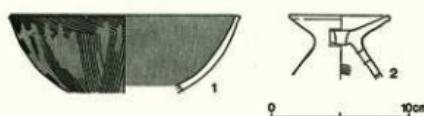
である。ローム面から床面までの深さは 10~15 cm と比較的浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【壁溝】は北壁と南壁それぞれの中央付近にわずかに見られ、幅10数cm、深さ10 cm前後である。炉は地床炉で、発掘区域東端で半分だけ検出された。ピットは3個検出され、このうちP<sub>1</sub>はその位置から考えると主柱穴の可能性もある。床面は住居址中央部がロームをそのまま残し、そのままわりを壁から1 m前後の幅で黒色土帯(貼床)が巡る。遺物は1高杯が床面直上から出土している。

5号住居址出土土器 (第45図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	1	口径(16.3)	杯部内弯気味に開き、口唇部平坦。	外面ハケ整形後タテヘラ磨き・丹彩。内面ミコハケ後ヘラ磨き・丹彩。	
器台	2		器受部直線的に開き丸い口唇部に至る。脚部2孔。	内外面ともヘラ磨き。脚部内面ハケ整形後ナデ。にぶい橙色。	

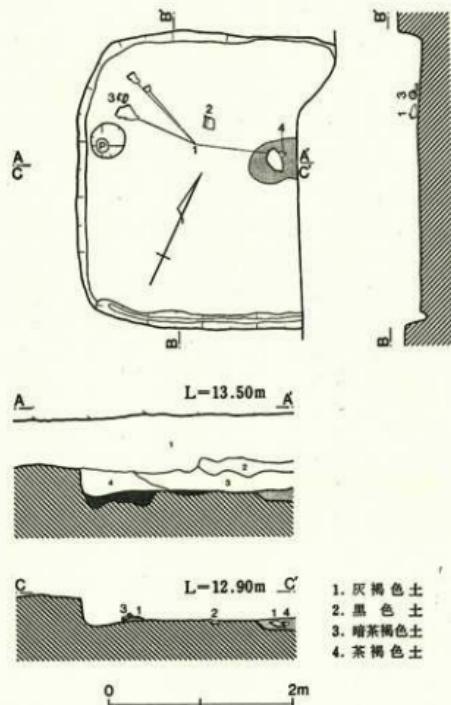


第44図 5号住居址床面状態図



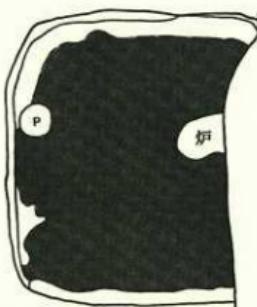
第45図 5号住居址出土遺物

**6号住居址（第46・47図）**  
 5号住居址の南約3mに位置し、7号住居址とは約1mの距離で接続している。発掘区域東端にかかり完掘はできなかったが、北壁が東端わずかに曲がることから、住居址の大部分は検出されたと考えられる。住居址の大きさは南北幅3.2mで、隅丸方形を呈すると考えられる。南北方向を主軸方向と考えると、N-26°-Wである。ローム面から床面までの深さは20数cmで、壁は垂直に立ち上がる。壁溝は南壁際にのみ見られ、幅約10cm、深さ数cmである。炉は地床炉で、発掘区域東端にかかって検出され、東西に長い椭円形を呈すると考えられる。ピットは西壁際北寄りで1個検出されたのみである。床面はほぼ全面、ローム塊が混入した黒色土による貼床で、北壁際と西壁

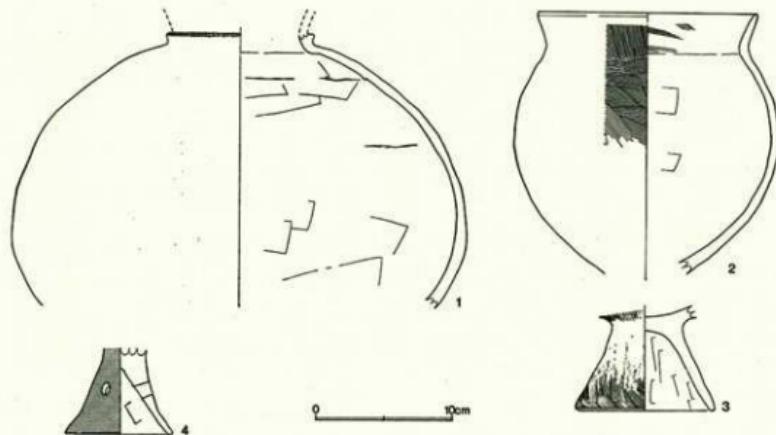


第46図 6号住居址

際の一部にロームがそのまま残っている。土器1～4はすべて床面直上からの出土である。1壺は炉の中と住居址西コーナー付近とから検出された破片が接合したものである。また4高杯も炉の中から出土している。



第47図 6号住居址床面状態図



第48図 6号住居址出土遺物

#### 6号住居址出土土器（第48図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		頸部外面に凸帯があり、棒状工具による刺み目が施される。胴部偏平。	外面密なハラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	床直。
台付壺	2		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反気味に開き、丸い口唇部に至る。	外面細かいハケ整形後。胴部下半ハラ磨き。内面工具によるナデ。口唇部ヨコナデ。にぶい黄橙色。	床直。
台付壺	3	底径 10.2	脚台部ほぼ直線的に開く。	外面細かいハケ整形後ナデ。	床直。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	4	底径 7.9	脚台部直線的に開いた後、裾部で外に屈曲し、端部に至る。3孔。	内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。 外面タテヘラ磨き・丹彩。内面工具によるナデ。胎土もろく器表の剥落激しい。赤褐色。	床直。

## 7号住居址（第49図）

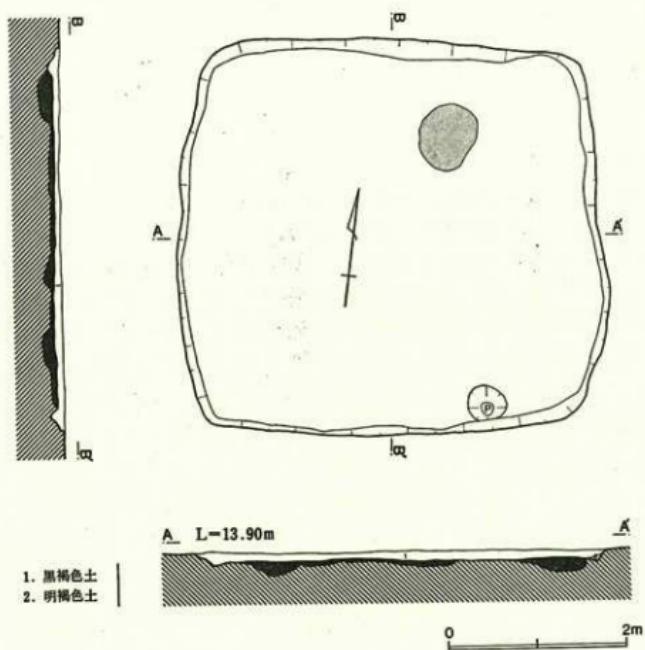
6号住居址の南約1mに隣接して存在する。大きさは4.4m×4.7mで、主軸方向に対して横に長い隅丸方形を呈する。主軸方向はN-6°-Wである。ローム面から床面までの深さは10cm前後と極めて浅く、壁は緩く傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角347°、距離130cmに位置し、主軸方向にやや長い楕円形を呈する。ピットは南壁際東寄りで貯蔵穴と考えられるものが1個検出されたのみである。中心の位置は方向角151°、距離215cmで、大きさは径約40cmである。土器1~4はすべて覆土からの出土である。

## 7号住居址出土土器（第50図）

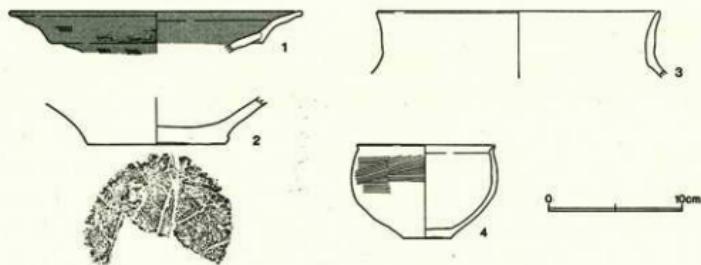
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		複合口縁。口縁部外側に鋭く屈曲。	外面ハケ整形後ヘラ磨き・丹彩。内面ヨコヘラ磨き・丹彩。にぶい黄橙色。	
壺	2	底径 10.3	やや上げ底。	底部木葉痕残る。橙色。	
壺	3		頭部緩く屈曲し、口縁部外反気味に開き丸い口唇部に至る。	砂っぽく整形不明。浅黄色。	
壺	4	口径(10.2) 底径 3.7 器高 7.0	内窪して立ち上がり、口唇部で外に短かく屈曲。平底。	外面ヨコハケ後ナデ。内面ヘラ磨き。口唇部ヨコナデ。赤橙色。	

## 8号住居址（第51・52図）

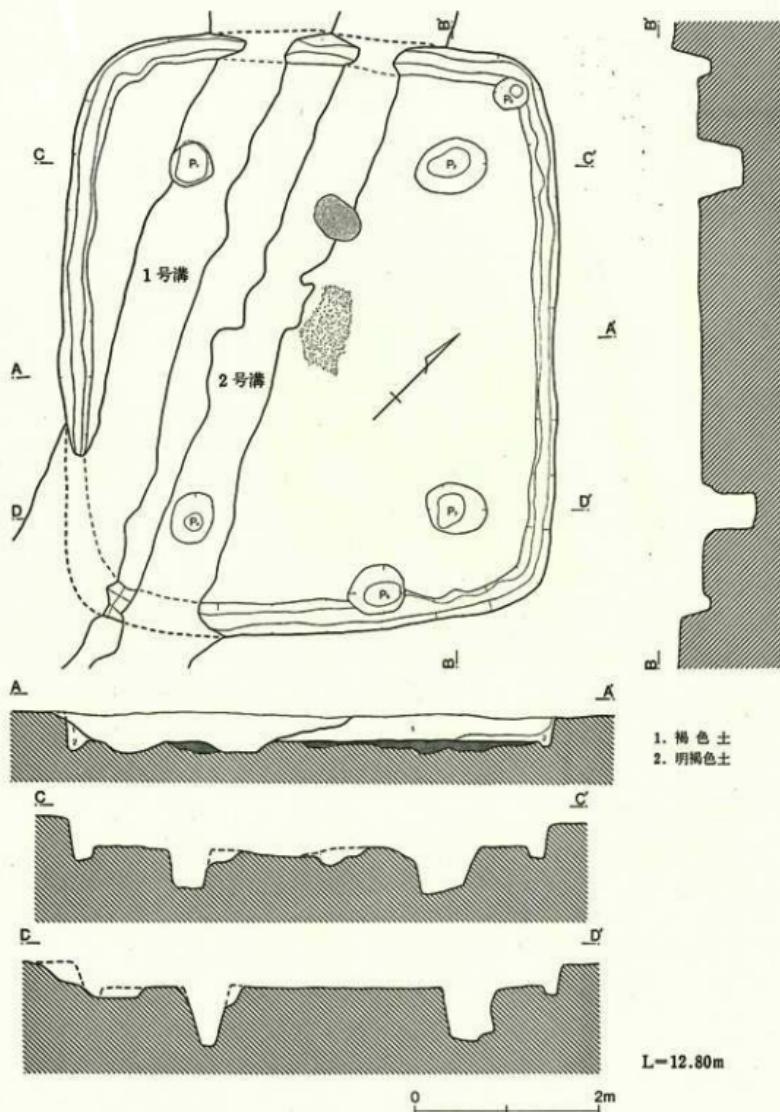
7号住居址の南西約9mに位置し、南北に延びる2本の溝によって、住居址の西半分が切られている。6.5m×5.3mの隅丸方形を呈する、本遺跡中最大の規模をもつ住居址である。主軸方向はN-45°-Wである。ローム面から床面までの深さは30cm前後で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は溝による擾乱の部分を除いて全周する。幅15~23cm、深さは5~15cmである。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角7°、距離130cmに位置し、東西にやや長い楕円形を呈する。ピットは6個検出され、うちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴である。柱穴の規模も住居址に比例してか、他の住居址より大きい。深さはP<sub>1</sub> 40cm、P<sub>2</sub> 53cm、P<sub>3</sub> 60cm、P<sub>4</sub> 65cmである。南東壁際中央やや東寄りに貯蔵穴と考えられるP<sub>5</sub>が検出された。中心の位置は方向角167°、距離280cmで、大きさは長径62cm、短径52cmである。この他、北コーナー際にP<sub>6</sub>



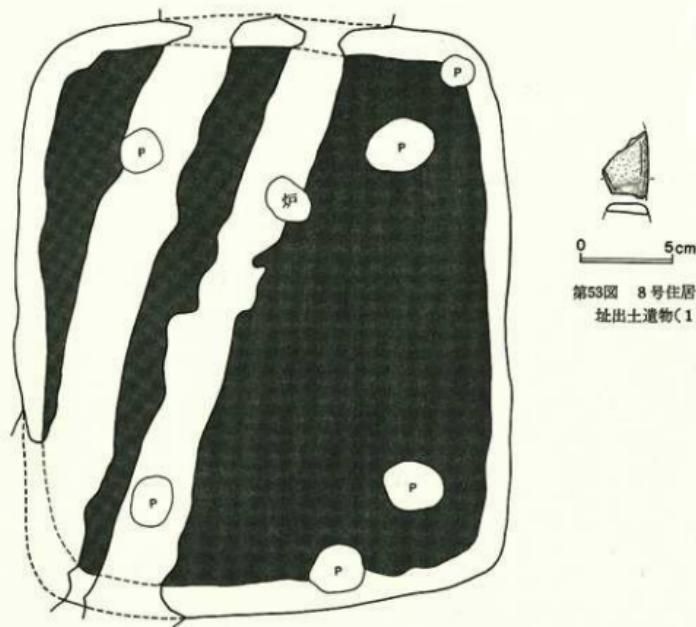
第49圖 7號住居址



第50圖 7號住居址出土遺物



第51圖 8号住居址

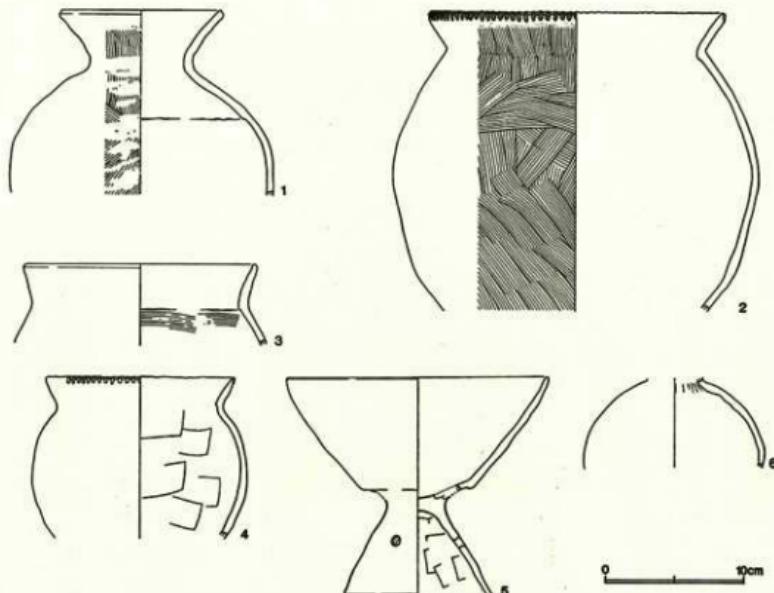


第52図 8号住居床面状態図

が検出された。床面は全面、黒色土とロームの混合土による貼床であるが、住居址中央付近はローム塊がまばらに敷かれて堅くなっている。図示した遺物はすべて覆土からの出土である。

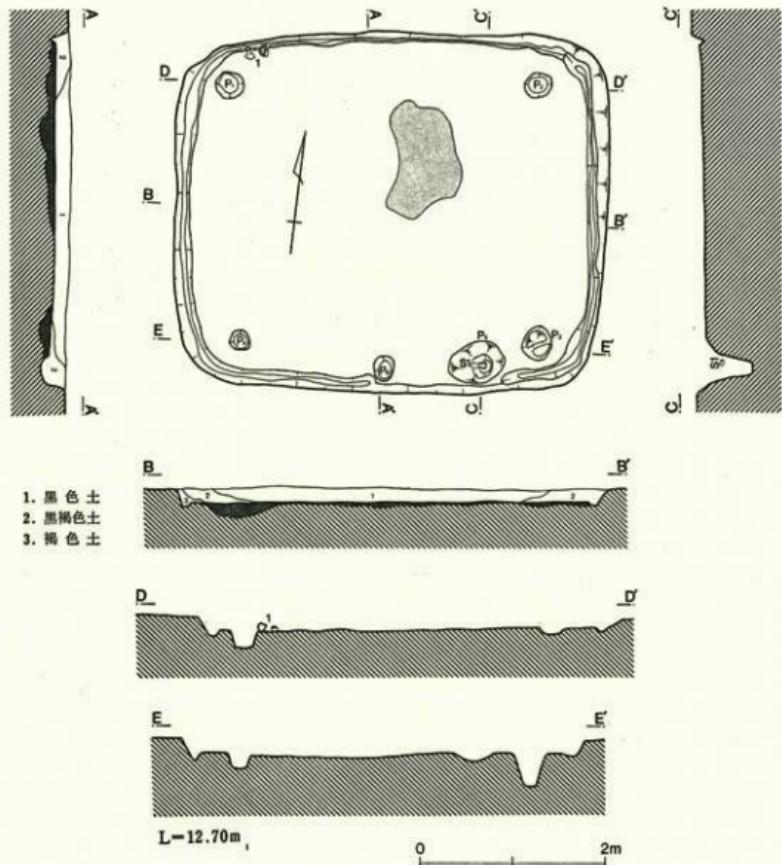
## 8号住居址出土土器（第54図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		頸部2段に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。	外面粗いハケ整形後部分的ヘラ磨き。口唇部ヨコナデ。にぶい黄褐色。	
壺	2		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開く。口唇部外面ハケ状工具による刻み目。胴部最大径ほぼ中位に存す。	外面ハケ整形。内面工具によるナデ。口唇部ヨコナデ。にぶい褐色。	
壺	3		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。	胴部内面ヨコハケ後ナデ。口唇部ヨコナデ。にぶい橙～にぶい褐色。	

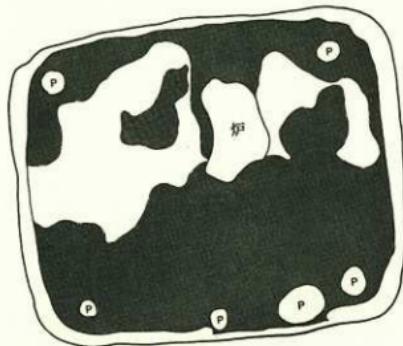


第54図 8号住居址出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	4		頸部緩やかに屈曲し、口縁部直線的に開く。口唇部外面棒状工具による刻み目。胴部最大径ほぼ中位に存す。	内面工具によるナデ。口縁部ヨコナデ。にぶい褐色。	
高杯	5	口径(18.7) 底径(10.6) 器高(15.8)	杯部やや内窓気味に開き、丸い口唇部に至る。杯底部に純い腹をもつ。脚台部やや内窓気味に開く。3孔。	外面タテヘラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
壺	6			外面タテヘラ磨き。内面器表の剥落激しく整形不明。にぶい橙色。	



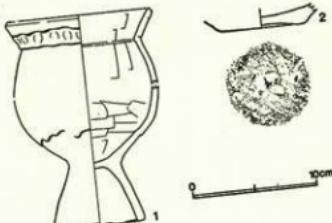
第55図 9号住居址



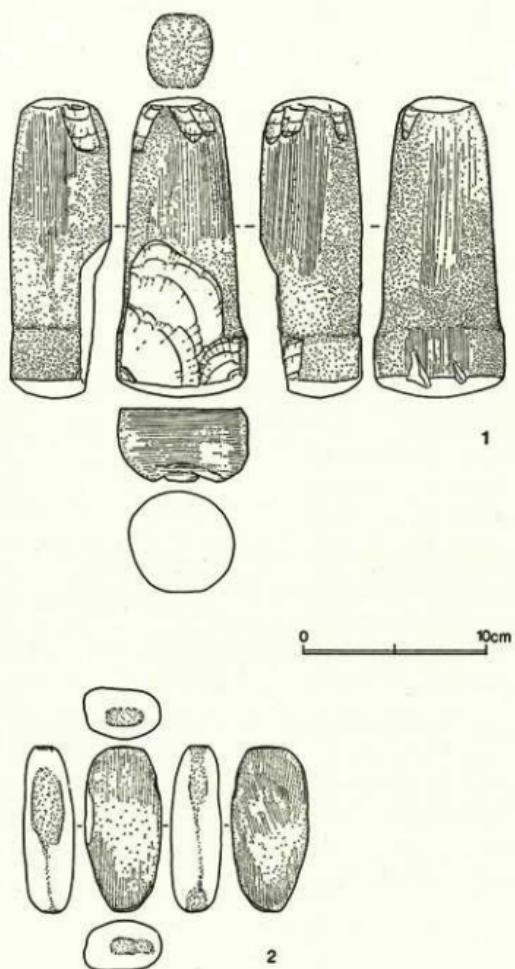
第56図 9号住居址床面状態図

9号住居址（第55・56図）

7号住居址の南約6m、8号住居址の東約2mに位置する。3.8m×4.6mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-6°-Wである。ローム面かし、床面までの深さは10数cmと比較的浅く、壁はかなり傾斜して立ち上がる。壁溝はほぼ全周するが、南壁中央部P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間で切れている。壁溝の幅は10cm前後、深さは5cm前後である。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角37°、距離75cmに位置する。径1.3m×0.8mと比較的大きく、主軸方向に長い不整形を呈する。ピットは主柱穴が4本(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)、ほぼ住居址の対角線上で検出された。深さはP<sub>1</sub> 19cm、P<sub>2</sub> 7cm、P<sub>3</sub> 36cm、P<sub>4</sub> 15cmである。南壁際のP<sub>1</sub>は貯蔵穴と考えられる。中心の位置は方向角147°、距離195cmであり、深さ約50cm、大きさは長径60cm、短径45cmである。これら以外に南壁際中央にP<sub>5</sub>が検出された。深さは約10cmである。床面は大部分が黒色土による貼床であるが、住居址中央、炉址の東側と西側にロームが残っている。遺物は土器1台付甕が北壁際の床面上から、石器1台が貯蔵穴内、床面下10数cmで検出された。他の遺物は覆土からの出土である。



第57図 9号住居址出土遺物(1)



第58図 9号住居址出土遺物（2）

## 9号住居址出土土器（第57図）

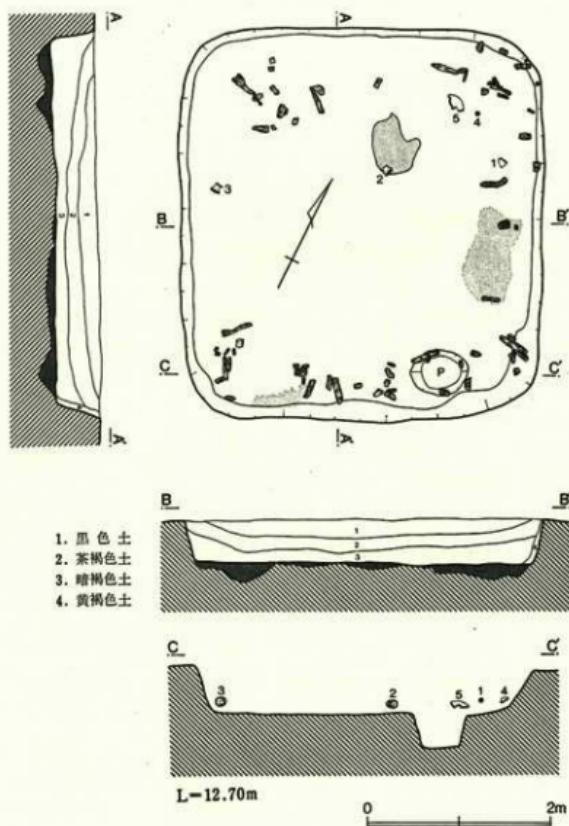
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径(11.5) 底径 7.4 器高(17.0)	頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部直線的に開き、平坦な 口唇部に至る。口縁部2段の 輪積痕。ほぼ球腹。脚台部内 窓気味に開く。	外面ナデ整形。口縁部ヨコナ ギ後指頭による押圧。両面工 具によるナデ。にぶい橙色。	床直。
壺	2	底径 6.7	やや上げ底。	底部ヘラ削り。橙色。	

## 10号住居址（第59・60図）

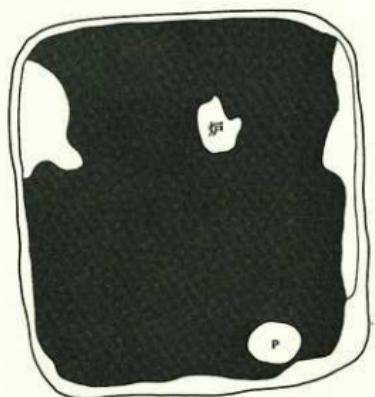
9号住居址の南東約50cmのところに極めて近接して位置する。4.3m×3.9mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-26°-Wである。ローム面から床面までの深さは約50cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角16°、距離90cmに位置する。柱穴は見つかなかったが、南壁際東寄りに貯蔵穴と考えられるピットが検出された。中心の位置は方向角154°、距離180cmで、大きさは60cm×50cm、深さは約40cmである。床面の状態はほぼ全面、黒色土とロームの混合土による貼床で、東壁際と西壁際にわずかにローム面が残っている。遺物は土器2が炉の中から床面と同一レベルで検出された以外はすべて覆土からの出土である。

## 10号住居址出土土器（第61図）

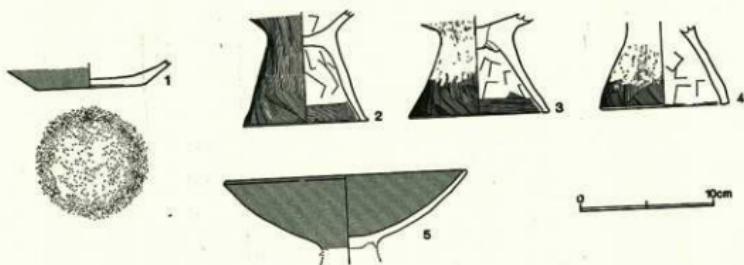
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 8.0	底部外縁にドーナツ状の粘土 帯を貼付。	外面ヘラ磨き・丹彩。にぶい 黄橙色。	
台付甕	2	底径 9.4	脚台部やや内窓気味に開いた 後、掘部でやや外反。	外面タテヘナナメハケ。内面 掘部ヨコハケ、他は工具によ るナデ。にぶい橙色。	
台付甕	3	底径 10.6	脚台部やや外反気味に開く。	外面ハケ整形後ナデ。内面掘 部ヨコハケ、工具によるナ デ。灰褐色。	
台付甕	4		脚台部やや内窓気味に開く。	外面タテハケ後ナデ。内面工 具によるナデ。浅黄橙～にぶ い黄橙色。	
高 瓶	5	口径(18.0)	瓶部内窓して開き、丸い口唇 部に至る。瓶底部で腰をもた ず、そのまま脚台部に移行。	内外面ともヘラ磨き・丹彩。 にぶい橙色。	



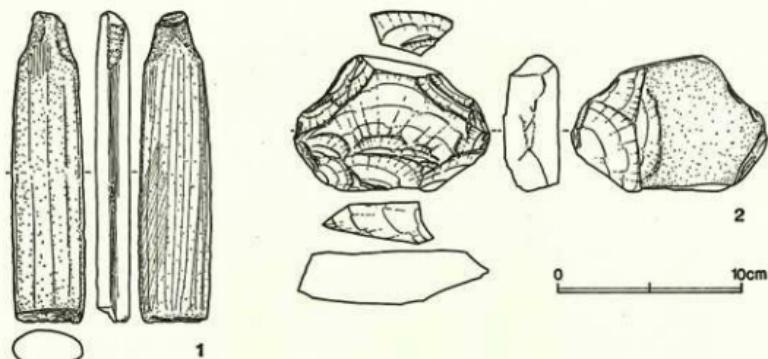
第59図 10号住居址



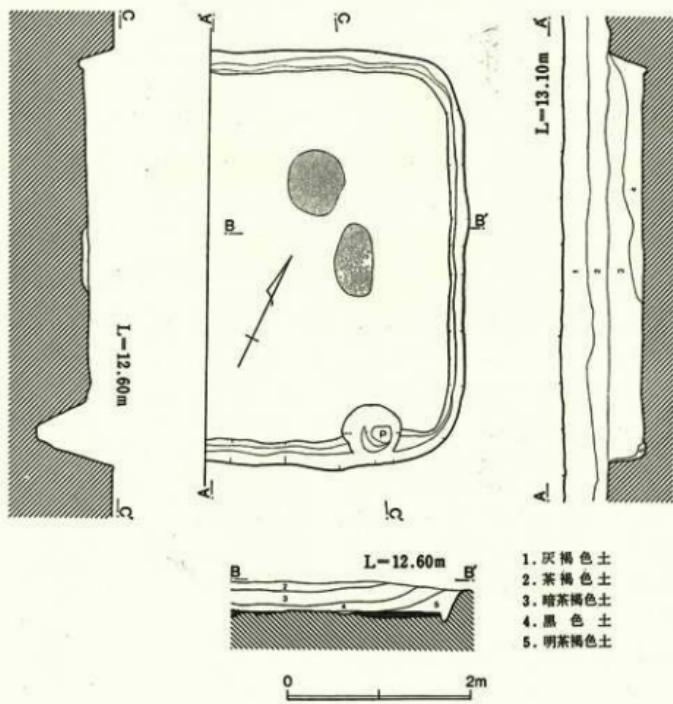
第60図 10号住居址床面状態図



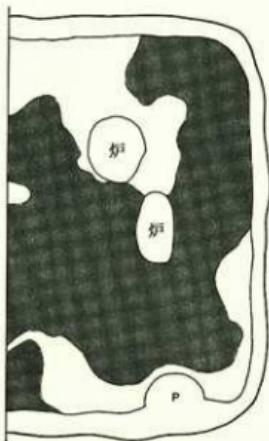
第61図 10号住居址出土遺物（1）



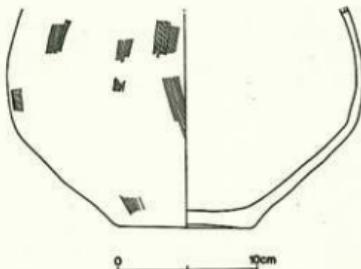
第62図 10号住居址出土遺物 (2)



第63図 11号住居址



第64図 11号住居址床面状態図



第65図 11号住居址出土遺物（1）



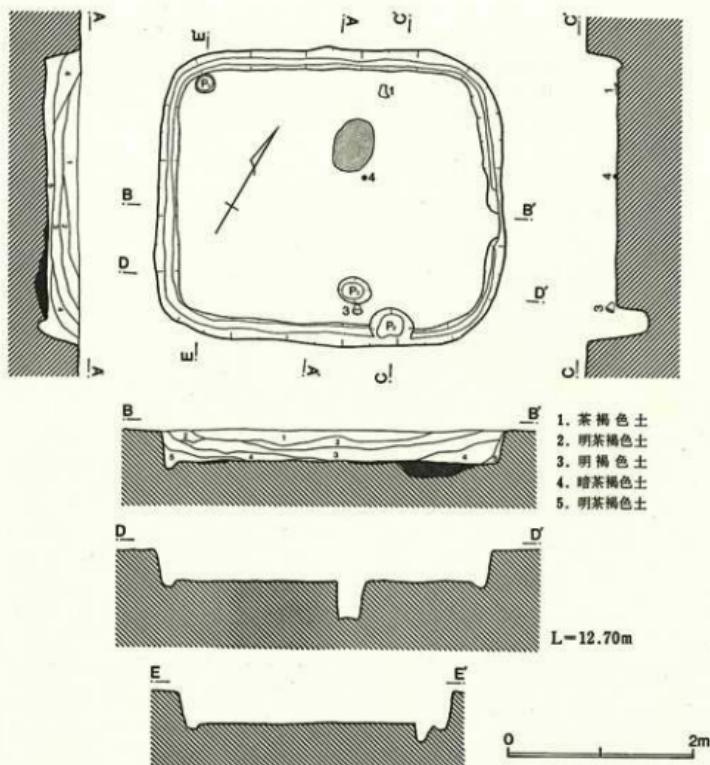
第66図 11号住居址出土遺物（2）

## 11号住居址（第63・64図）

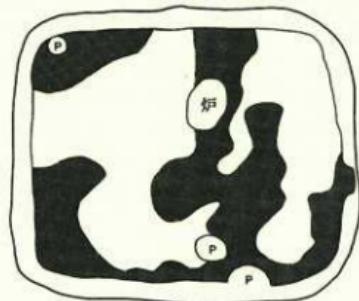
発掘区域西端で半分だけ検出された。他の住居址とは距離を隔てて存在する。南北軸長4.5mで隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN-31°-Wである。ローム面から床面までの深さは25~30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は住居址が確認できた範囲では全局する。幅10~15cm、深さ数~10cmであり、東壁際では底が丸くならず段面V字形を呈す。炉は中央よりやや北寄りに地床炉が2個存在する。いずれも主軸方向に長い椭円形を呈す。貯蔵穴と考えられるピットが南壁際東寄りに壁溝を切る形で検出された。大きさ 65cm×55cm、深さは約50cmである。貯蔵穴の北側の床は三日月状に若干高くなっている。床面は黒色土をベースにローム塊をびっしり敷きつめた貼床が広範囲にわたって広がるが、東壁際から南壁際にかけてと、2つの炉から北壁際にかけてはロームがそのまま残っている。遺物はすべて覆土から出土した。

## 11号住居址出土土器（第65図）

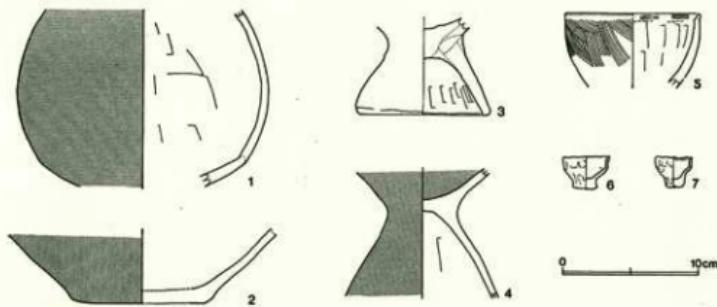
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺		胴径(26.5) 底径 9.7	胴部最大径下位に存す。やや上げ底。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。縁へにぶい黄褐色。	



第67圖 12号住居址



第68圖 12号住居址床面状態図



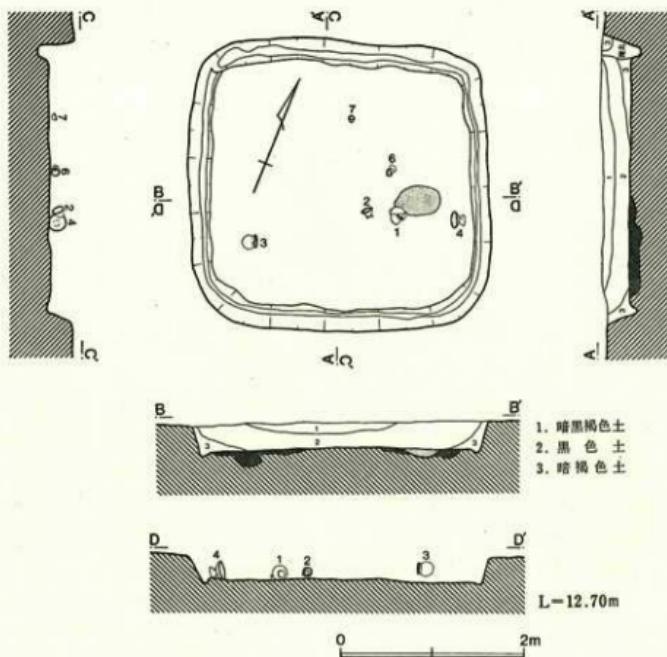
第69図 12号住居址出土遺物

## 12号住居址（第67・68図）

10号住居址の南東約11mに位置する。3.1m×3.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-29°-Wである。ローム面から床面までの深さは約35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は東壁中央でわずかに切れるが、あとは全周し、幅15cm前後、深さ数cmである。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角29°、距離60cmに位置し、主軸方向に長い椭円形を呈する。ピットは3個検出されたが、このうち西コーナーのP<sub>1</sub>はその位置から主柱穴と考えられ、深さは20cmである。南壁際のP<sub>2</sub>は貯蔵穴と考えられ、その中心は方向角152°、距離160cmに位置する。大きさは50cm×35cm、深さは35cmである。P<sub>3</sub>は性格不明で深さは40cmである。床面は南壁際から住居址中央にかけて、及び北西コーナー付近が黒色土をベースにローム塊を數いた貼り床であり、他はロームをそのまま床面としている。遺物は1・3・4が床面直上から、それ以外はすべて覆土からの出土である。

## 12号住居址出土土器（第69図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		肩部最大径やや下位に存す。	外面ヘラ磨き・丹彩。内面工具によるナデ。にぶい橙。	床直。
壺	2			外面ヘラ磨き・丹彩。にぶい橙色。	
台付壺	3	底径 9.8	脚台部内弯気味に開く。短かく、器肉厚い。	外面ナデ整形。内面工具によるナデ。	床直。
高壺	4		壺部底部から脚台部に滑らかに移行。	内外面ともヘラ磨き・丹彩。脚台部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	床直。
塊	5	口径(9.8)	内弯して立ち上がり、口唇部で短かく外反。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。口唇部ヨコナデ。橙色。	

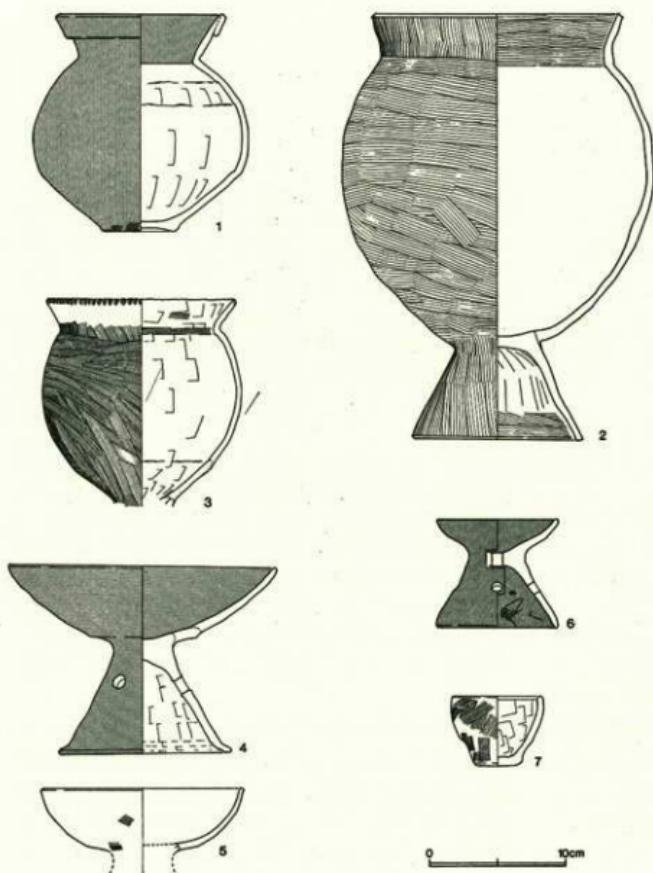


第70図 13号住居址

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
手捏土器	6	器高 2.4		黒褐色。	
手捏土器	7	器高 2.2		黒褐色。	

## 13号住居址（第70図）

12号住居址の南約4mに位置する。3.3m×3.1mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-67°-Eである。ローム面から床面までの深さは25~30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は全局するが、北西コーナーで段になっている。幅10~15cm、深さ3~10cmである。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角10°、距離80cmに位置し、主軸方向に長い椭円形を呈する。床は全面ロームをそのまま用いており、貼床は見られない。遺物は1・2・4・6・7が床面直上から、3・5が覆土からの出土である。



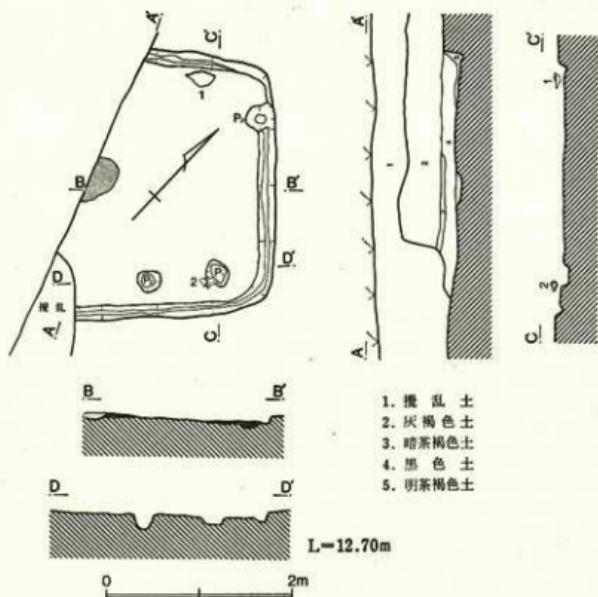
第71圖 13号住居址出土遺物

## 13号住居址出土土器（第71図）

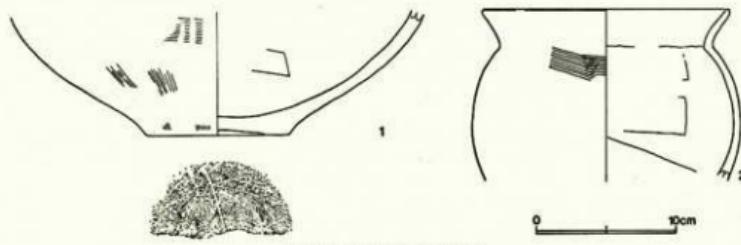
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 12.0 胴径 15.9 底径 5.3 器高 15.9	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き折り返し口縁となる。口唇部平坦。肩部丸く、胴下半直線的、最大径はほぼ中位に存す。やや上部底。	口縁部内外面ともヨコナデ後丹彩。胴部外面ヘラ磨き・丹彩。内面工具によるナデ。	床直。
台付壺	2	口径(17.8) 胴径(23.0) 底径 12.6 器高 31.2	頸部2段に屈曲し、口縁部や内窩気味に開き、平坦な口唇部に至る。やや長胴で最大径やや上位に存す。脚台部や内窩気味に開く。	口縁部内面、胴部外面ヨコハケ。口縁部外面、脚台部外面タテハケ。脚台部内面ヨコハケ後工具によるナデ。胴部黒褐褐色。脚台部にぶい橙色。	床直。
台付壺	3	口径 13.7 胴径 14.7	頸部緩く屈曲し、口縁部直線的に開く。口唇部外面にハケ状工具による刻み目。やや長胴で最大径上位に存す。	胴部外面ハケ整形。口縁部ハケ整形後ヨコナデ。胴部内面工具によるナデ。	
高 壺	4	口径 19.7 底径 12.8 器高 13.7	壺内部内窩気味に開き、口唇部やや鋭い。壺底部に稜をもつ。脚台部や内窩気味に開き、裾部で外反。3孔。	外面ともヘラ磨き・丹彩。口唇部ヨコナデ。脚台部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	完存。床直。
高 壺	5	口径(15.3)	壺内部内窓して開き、丸い口唇部に至る。	外面ともナデ。	
器 台	6	口径(9.0) 器高 8.0	器受部外反気味に開いた後内弯して丸い口唇部に至る。接合部短かい。脚台部直線的に開いた後、裾部で内弯。4孔。	外面ともヘラ磨き・丹彩。口唇部ヨコナデ。脚台部内面工具ナデ後丹彩。にぶい橙色。	床直。
手 振 土 器	7	器高 5.2	内窩気味に開き、丸い口唇部に至る。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	床直。

## 14号住居址（第72図）

発掘区域西端に位置し、住居址の西半分は発掘区域外にかかってしまい検出できなかった。南北軸長2.8mの小型住居址で、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向は、北東壁に平行と考えるとN-44°-Wである。ローム面から床面までの深さは5~10cmで極めて浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は北コーナー以外、住居址の確認された範囲ではほぼ全周する。幅数~10cm、深さ数cmである。炉は地床炉で発掘区域西端で半分だけ検出された。ピットは3個検出された。東コーナーP<sub>1</sub>はその位置から主柱穴と考えられるが、深さは7cm程度で浅い。P<sub>2</sub>は深さ15cmである。土器1・2はいずれも覆土からの出土である。



第72圖 14号住居址



第73圖 14号住居址出土遺物

## 14号住居址出土土器（第73図）

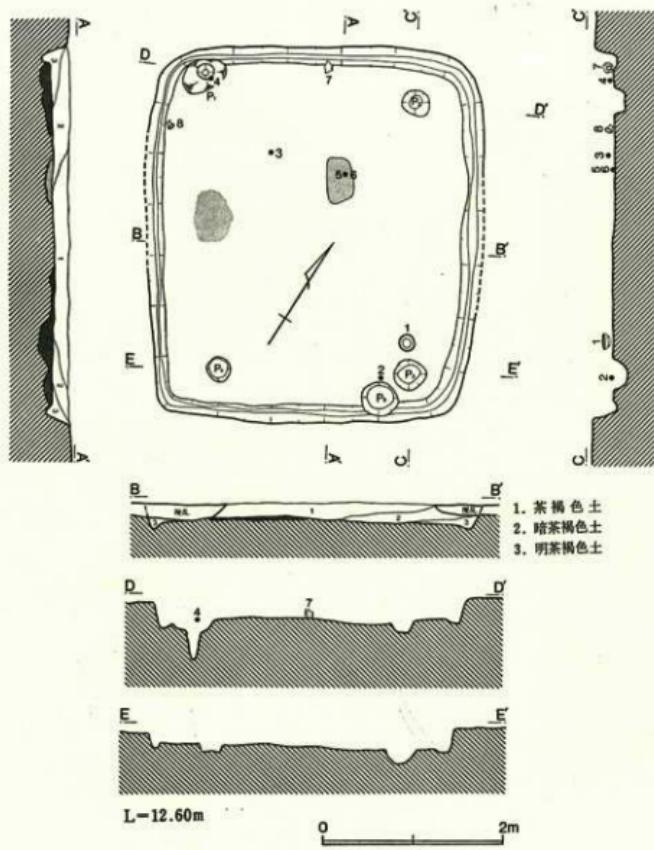
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径(10.2)	上げ底。	底部木葉痕残る。外面ハケ整形後タテヘラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
甕	2		頸部ゆるく屈曲し、口縁部直線的に開き丸い口唇部に至る。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	

## 15号住居址（第74図）

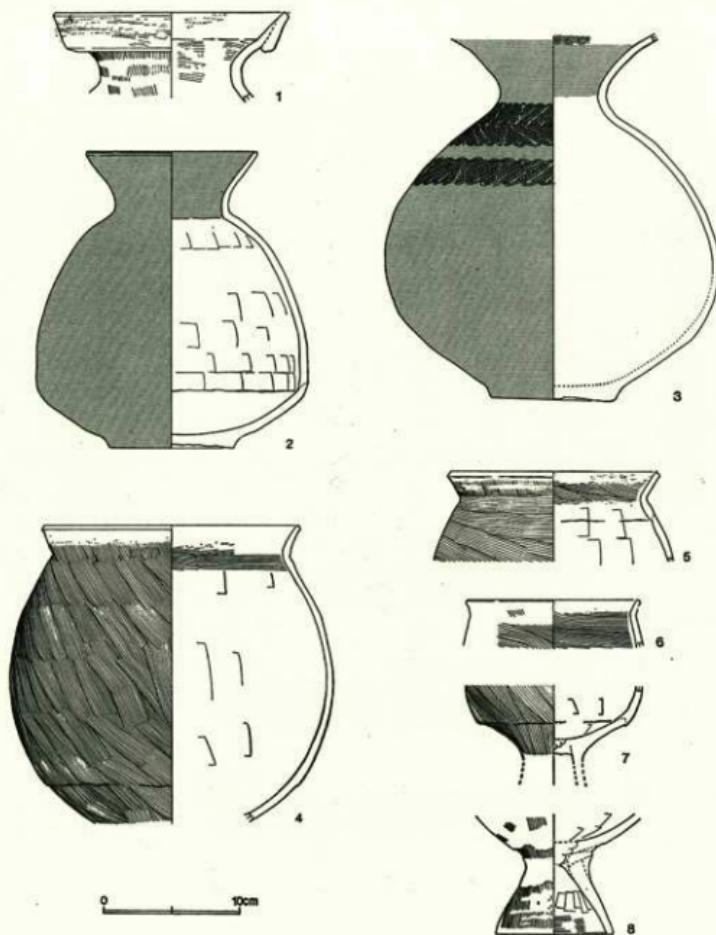
14号住居址の東約3mに位置し、東西両壁それぞれの中央部で浅く擾乱を受けている。4.1m×3.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-31°-Wである。ローム面から床面までの深さは15~20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は全周し、幅10~15cm、深さ数cmである。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角19°、距離65cmに位置し、主軸方向に長い不整橈円形を呈する。ピットは5個検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴である。このうちP<sub>1</sub>のみ壁際に位置し、また形態も2段で他の3個と異なっている。深さはP<sub>1</sub> 40cm, P<sub>2</sub> 12cm, P<sub>3</sub> 15cm, P<sub>4</sub> 9cmで、P<sub>1</sub>以外は非常に浅い。南壁際のP<sub>3</sub>は貯蔵穴と考えられ、その中心は方向角156°、距離190cmに位置する。大きさは40cm×40cmである。図示した土器のうち4甕はP<sub>1</sub>内から床面とほぼ同一レベルで出土した。他の土器はすべて床面上から検出された。

## 15号住居址出土土器（第75図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 16.7	頸部2段に屈曲し、口縁部外反気味に開いて折り返し口縁となる。口唇部平坦。	外面ともハケ整形後ヘラ磨き。口唇部ヨコナデ。橙色。	床直。
壺	2	口径 12.6 胴径 20.0 底径 9.2 器高 21.8	頸部2段に屈曲し、口縁部や内面気味に開き、丸い口唇部に至る。胴部下位で鋭く屈曲。最大径屈曲点に存す。やや上げ底。	外面及び口縁部内面ヘラ磨き・丹影。口唇部ヨコナデ。胴部内面工具によるナデ。	ほぼ完成。 床直。
壺	3	胴径 14.6 底径 9.0	頸部緩やかに屈曲し、口縁部外反気味に開く。胴部下彎れで最大径やや下位に存す。	肩部に3段の繩文帯。上2段はLRとRLの単節繩文で羽状繩文を呈す。最下段はLRの単節繩文。3段とも上下端をS字状結節文で区画。外面繩文帯以外はヘラ磨き・丹影。口縁部内面上端LR単節繩文+S字状結節文。その下はヘラ磨・丹影。浅黄橙色。	床直。
甕	4		頸部「く」の字状に屈曲、口縁部外反気味に開き、丸い口	外面ナナメハケ整形。口縁部内面ヨコハケ、口唇部ヨコナ	



第74図 15号住居址



第75圖 15號住居址出土遺物

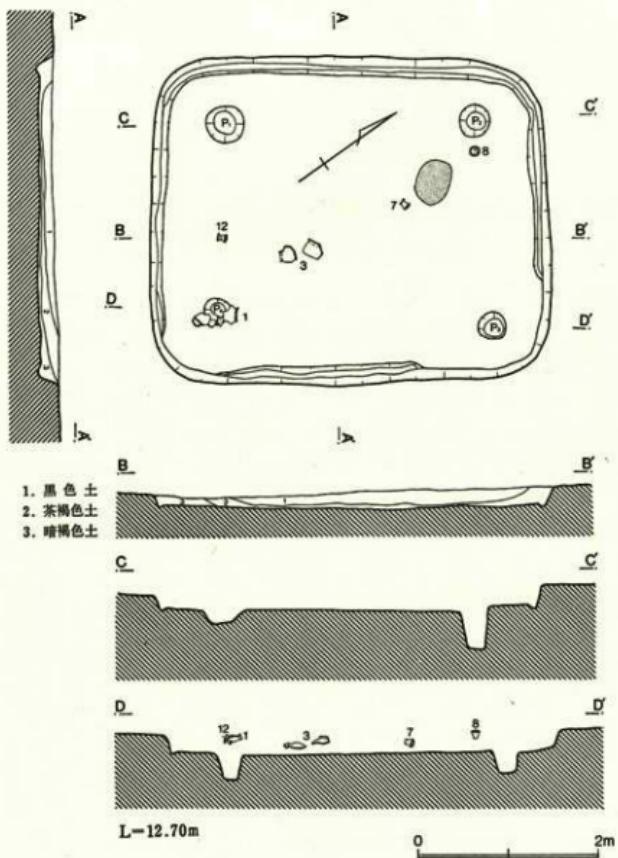
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	5		唇部に至る。胸部縦長球形で最大径中位に存す。 頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。	胸部内面工具によるナデ。橙～灰黄褐色。 外面・口縁部内面ハケ整形。口唇部ヨコナデ。胸部内面工具によるナデ。灰褐～にぶい褐色。	床直。
壺	6		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部短かく直線的に開き、平坦な口唇部に至る。	内外面ともハケ整形後、口縁部ヨコナデ。	床直。
台付壺	7		粘土紐接合部で屈曲。	外面ハケ整形。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	床直。
台付壺	8	底径 8.5	脚台部内反気味に開く。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。橙色。	床直。

## 16号住居址（第76・77図）

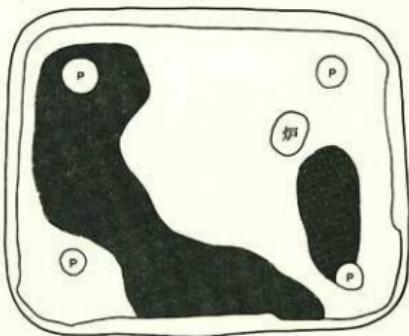
15号住居址の南東10mに位置する。3.5m×4.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-55°-Wである。ローム面から床面までの深さは20~30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は東コーナー及び南コーナー付近で切れる以外は全周し、幅10cm前後、深さ数cmである。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角70°、距離50cmに位置する。4本の主柱穴が、ほぼ住居址の対角線上で検出され、深さはP<sub>1</sub> 15cm, P<sub>2</sub> 45cm, P<sub>3</sub> 25cm, P<sub>4</sub> 30cmである。床面は炉とP<sub>3</sub>の間、及び南東壁からP<sub>1</sub>にかけて黒色土による貼床が広がるが、他はロームである。図示した土器はすべて覆土から出土したものである。

## 16号住居址出土土器（第78図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 14.6 胴径 20.0 底径 (6.8) 器高 19.6	頸部緩く屈曲し、口縁部外反して丸い口唇部に至る。ほぼ球胴。やや上げ底。	胸部外面タテハケ後ヨコヘラ磨き。口縁部ヨコナデ。胸部内面ナナメハケ後ナナメヘラ磨き。にぶい橙色。	
壺	2			外面ヘラ磨き、内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
壺	3		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反気味に開く。口唇部外面ハケ状工具による刻み目。	外面ハケ整形。口縁部内面ヨコハケ。胸部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
壺	4		頸部2段に屈曲し、口縁部外反気味に開き、平坦な口唇部に至る。	胸部外面ハケ整形。口縁部ヨコナデ。胸部内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
台付壺	5			内外面ともハケ整形後一部ナデ。橙色。	

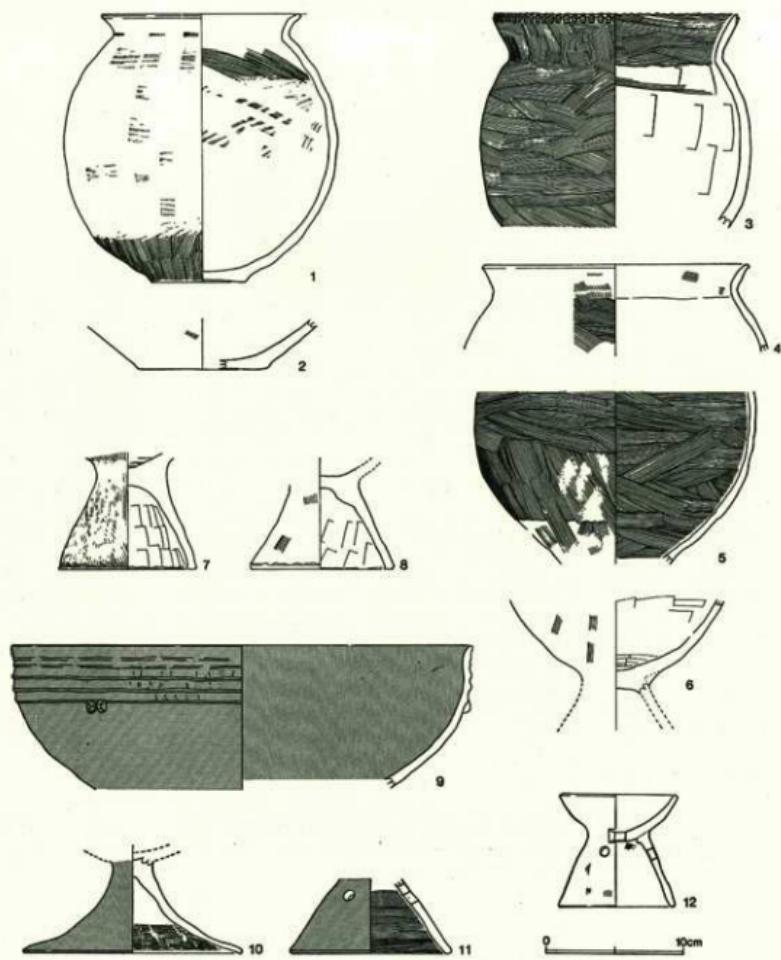


第76図 16号住居址



第77図 16号住居址床面状態図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	6			外面ハケ整形後ナヂ。内面工具によるナヂ。にぶい橙色。	
台付甕	7	底径 10.1	脚台部内湾気味に開く。	外面ハケ整形後ナヂ。内面工具によるナヂ。にぶい橙色。	
台付甕	8	底径 10.6	脚台部直線的に開く。	外面ハケ整形後ナヂ。内面工具によるナヂ。	
高坏	9		坏部内湾して開き、やや鋭い口唇部に至る。口縁部に5段の隆帯を巡らし、最下段の下に2個1組の小突起が付く。	内外面ともヨコヘラ磨き・丹彩。にぶい黄橙色。	吉ヶ谷式。
高坏	10		脚台部外反気味に大きく開く。	外面タテヘラ磨き・丹彩。内面ハケ整形・ナヂ。にぶい黄橙色。	
高坏	11			外面タテヘラ磨き・丹彩。内面ヨコハケ整形。	
器台	12	底径 8.5 器高 8.2	器受部内湾して開き、口唇部平坦。接合部短かい。脚台部ほぼ直線的に開く。4孔。	外面ハケ整形後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。にぶい橙色。	



第78 図 16号住居址出土遺物

## 17号住居址（第79図）

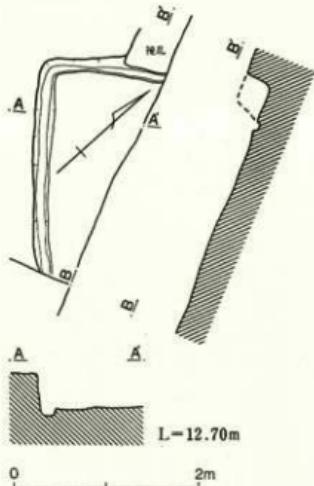
16号住居址の東 7.5 m に位置し、発掘区域にわずかにその北西コーナー付近のみかかって検出された。北壁東端は浅く擾乱を受け、住居址南側も、7号溝によって切られている。主軸方向は西壁と平行を考えると、およそ N-47°-W である。ローム面から床面までの深さは 30 数 cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は住居址の確認された範囲内では全周し、幅 10 数 cm、深さ数 cm である。

## 18号住居址（第80・81図）

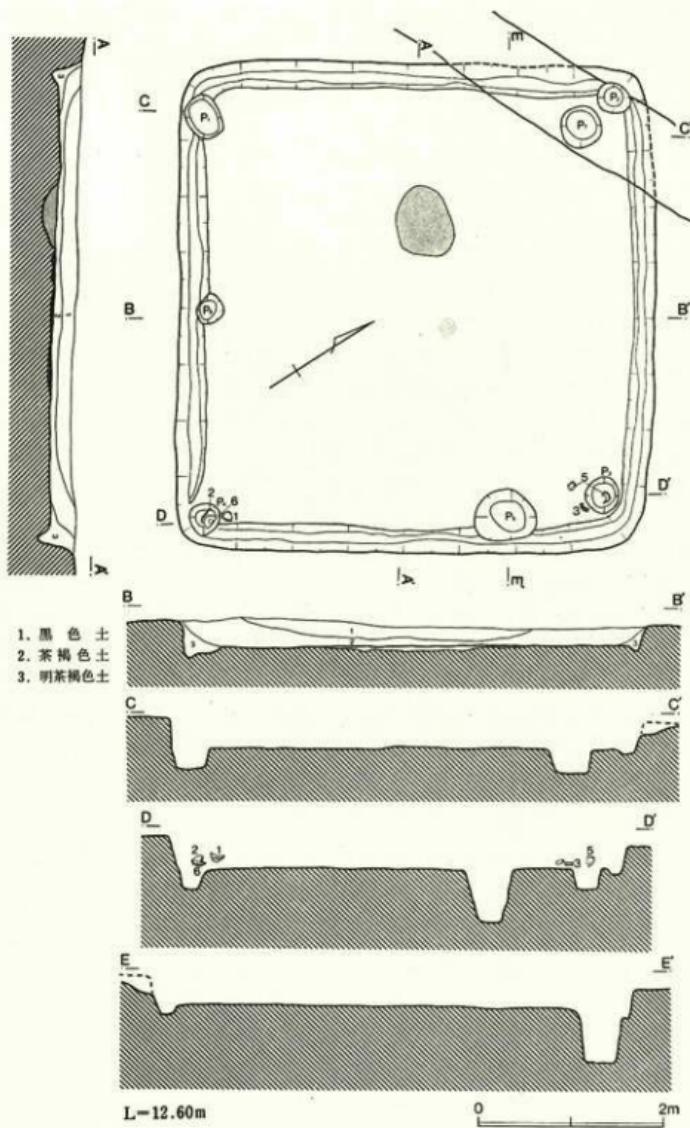
16号住居址の南 5.5 m に位置し、北コーナー付近を 8 号溝によって浅く切られる。5.2 m × 5.1 m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N-58°-W である。ローム面から床面までの深さは 20~30 cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はほぼ全周し、幅 10~15 cm、深さ 5~10 cm である。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角 13°、距離 50 cm に位置し、主軸方向にやや長い椭円形を呈する。ピットは 7 個検出され、うち主柱穴が 4 個各コーナー際に穿たれている ( $P_1 \sim P_4$ )。深さはいずれも 20 cm 前後である。南東壁際の  $P_5$  は貯蔵穴と考えられ、その中心は方向角 153°、距離 123 cm に位置し、大きさは 70 cm × 55 cm、深さ 60 cm である。 $P_6 \cdot P_7$  は性格不明であるが、深さは  $P_6$  7 cm、 $P_7$  25 cm である。床面は、北コーナー・東コーナーから炉をとり巻くような形で黒色土による貼床が広がっており、残りはロームである。遺物はいずれも覆土から出土したものであるが、5 小型壺が  $P_3$  上から、2 壺・6 壺が  $P_4$  上から検出された。

## 18号住居址出土土器（第82図）

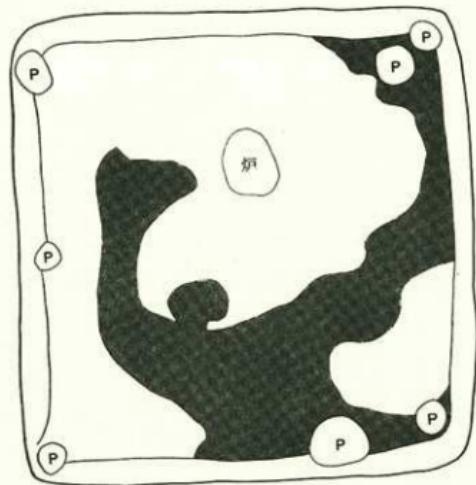
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 5.5	やや上げ底。	外面ハケ整形後タテヘラ磨。砂っぽく白色微砂粒を多量に含む。橙色。	
壺	2	底径 8.6	平底。	外面ヘラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
甕	3		口縁部 3 段の輪積痕を残し、口唇部外面にハケ状工具による刻み目を有す。	外面ヨコナデ後指頭による押圧。内面ヨコハケ。浅黄橙色。	
台付甕	4	底径 9.2	脚台部内湾気味に開く。	外面ハケ整形後接合部ナデ。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	



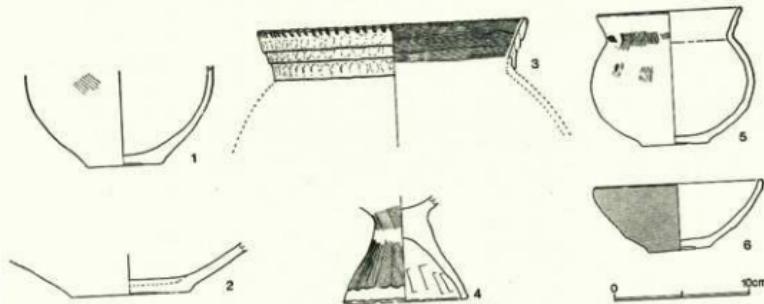
第79図 17号住居址



第80圖 18號住居址



第81圖 18號住居址床面狀態圖



第82圖 18號住居址出土遺物

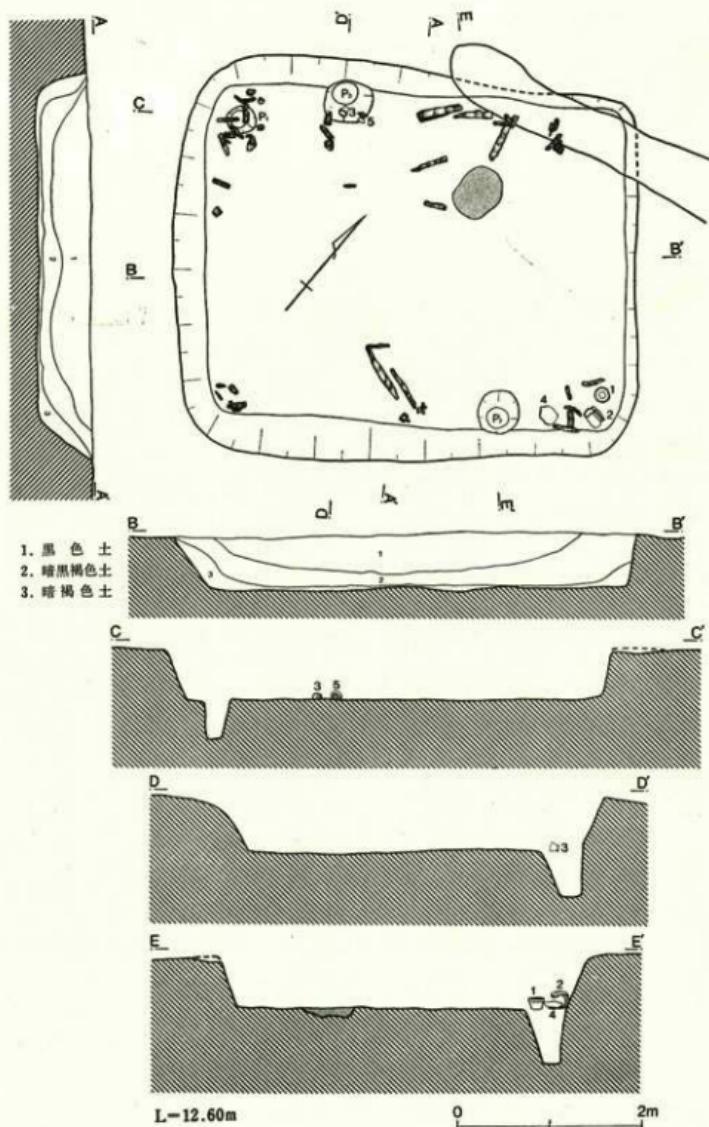
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺 (小型壺)	5	口径 10.6 胴径 12.1 底径 4.8 器高 9.9	頭部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、丸い口唇部に至る。	胸部外面タテハケ後タテヘラ磨き。口縁部ヨコナデ。橙色。	ほぼ完存。
壺	6	口径 12.0 底径 4.4	内窓気味に立ち上がり、丸い口唇部に至る。底部外縁ドーナツ状の粘土帯を貼付。	外面ともヘラ磨き。口唇部ヨコナデ。黄橙色。	

## 19号住居址（第83図）

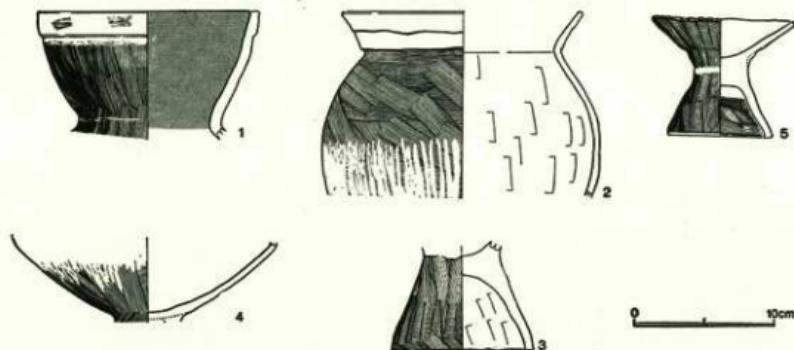
発掘区域南端のグループに属し、掘立柱建物址の南 9m、20号住居址の西 5m に位置する。北コーナー付近を 9号溝によってごく浅く切られる。4.2m×5.0m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N-41°-W である。ローム面から床面までの深さは約 55cm である。壁は北東壁のみほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外の 3 壁はかなり緩かな立ち上がりを見せる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角 41°、距離 45cm に位置する。ピットは 3 個検出された。このうち西コーナーの P<sub>1</sub> が柱穴と考えられ、深さは約 40cm である。残り 2 個は対応する壁際のほぼ対称の位置にあり、大きさ・深さも近似した値をとる (P<sub>2</sub> は大きさ 45cm×45cm、深さ 60cm、P<sub>3</sub> は大きさ 50cm×45cm、深さ 50cm)。炉との位置関係から P<sub>2</sub> が貯蔵穴と考えられ、その中心は方向角 155°、距離 95cm に位置する。炭化材が北西壁及び南東壁際から多数検出された。土器は、1・2・4 が東コーナー際の床面上から、3・5 が P<sub>3</sub> 上、床面と同一レベルで出土した。

## 19号住居址出土土器（第84図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 15.7	頸部やかに屈曲し、口縁部内窓気味に開き、平坦な口唇部に至る。折り返し口縁。	外面密なタテハケ整形。折り返し部ヨコハケ後ヨコナデ。内面ヘラ磨き・丹彩。橙色。	床直。
壺	2	口径 16.9 胴径(19.8)	頭部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。口縁部 2段の輪積痕を残す。	胸部外面ヨコハナメハケ整形後中位タテヘラ磨き。口縁部内外面ともヨコナデ。胸部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	床直。
台付壺	3	底径(10.1)	脚台部内窓気味に開く。	外面タテハケ整形。内面工具によるナデ。橙色。	
台付壺	4			外面タテハケ整形後タテヘラ磨き。内面粗いヘラ磨き。にぶい黄橙色。	床直。
(台付壺)	5	底径 7.5 器高 8.5	台付壺の胴部下位粘土帯接合部以下の部分。割れ口をナデて器台(?)に転用か。脚台部直線的に開く。	外面タテハケ後ナデ。胸部内面ナデ。脚台部内面ヨコハケ整形。橙色。	完存。



第83图 19号住居址



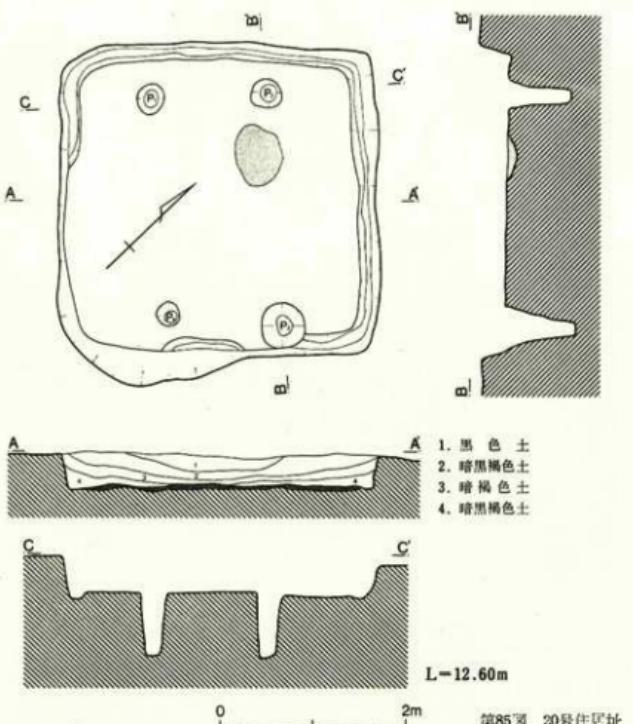
第84図 19号住居址出土遺物

#### 20号住居址（第85図）

発掘区域南端のグループに属し、掘立柱建物址の南東11.5m、19号住居址の東5mに位置する。3.4m×3.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wである。ローム面から床面までの深さは30~40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南コーナー付近は崩れて緩やかになっている。壁溝は南コーナー周辺及びP<sub>3</sub>付近で切れている。幅15~20cm、深さ数cmである。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角37°、距離35cmに位置し、主軸方向にやや長い椭円形を呈す。ピットは主柱穴が4本、住居址の対角線より内側に位置する。このうちP<sub>3</sub>のみ壁際に位置し、その規模も50cm×40cmと他の3個に比べて大きく、あるいは貯蔵穴の可能性も考えられる。

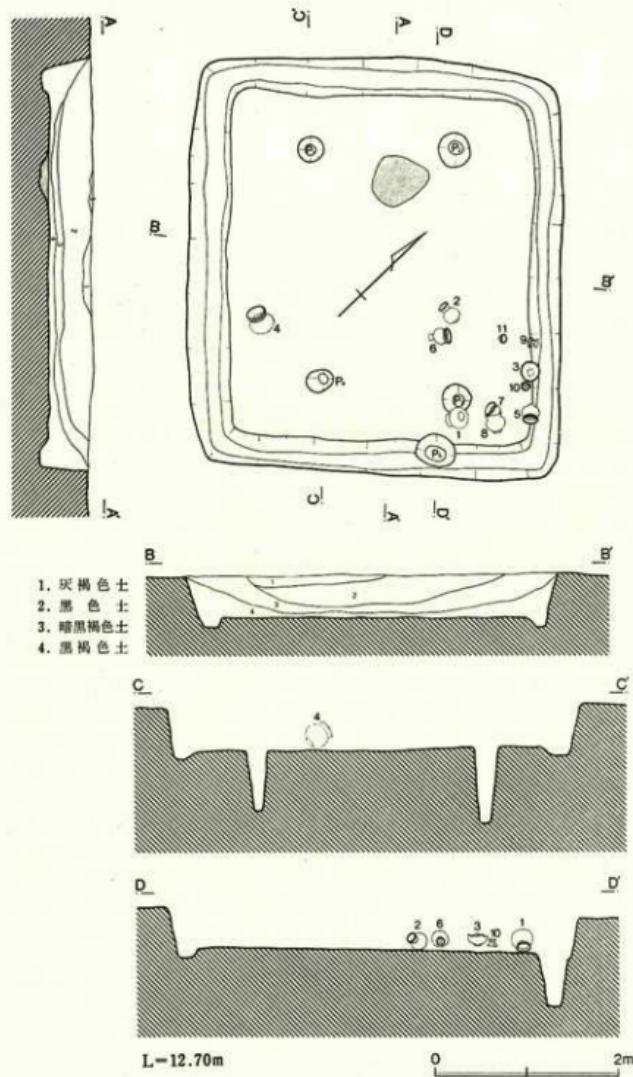
#### 21号住居址（第86図）

発掘区域最南端に位置し、これ以南沖積台地は続くものの、該期住居址が見つかっていないことから、集落の南端に占置された住居址と言えよう。4.5m×4.1mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wである。ローム面から床面までの深さは約50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は全周し、幅は20~30cmで比較的広く、深さは約10cmである。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角10°、距離50cmに位置する。ピットは5個検出された。そのうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴で、いずれも住居址の対角線よりも内側に位置し、深さは65~80cmと極めて深い。南壁際のP<sub>5</sub>は貯蔵穴と考えられる。中心の位置は方向角162°、距離100cmで、大きさ40cm×35cm、深さ55cmである。床は全面ロームをそのまま用いており、貼床は見られなかった。土器1~11はすべて床面上から、しかもほとんど完形のまま出土した。4壺以外は東コーナー付近でまとまって検出され、中でも7壺と8壺は組み合わさったままの状態であった。

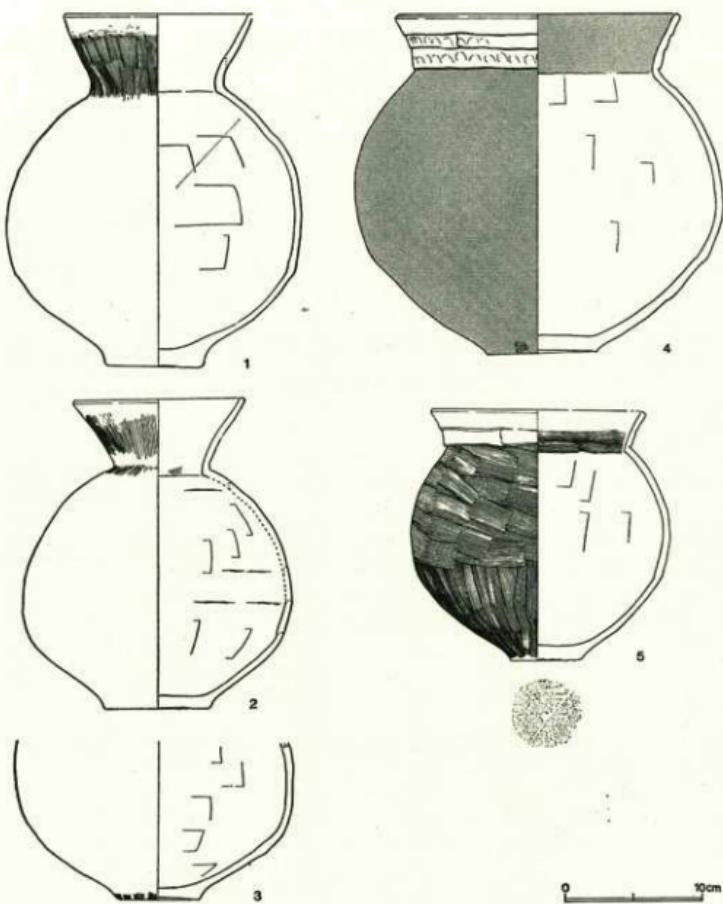


21号住居址出土土器 (第87・88図)

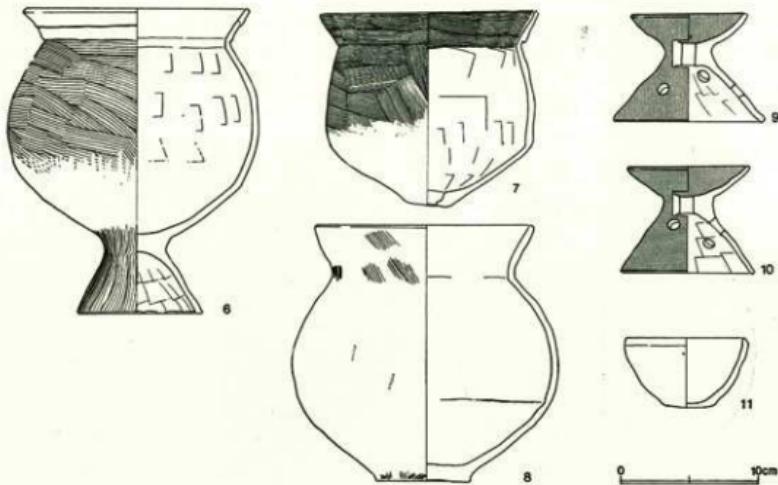
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 13.7 胴径 21.7 底径 7.0 器高 25.7	頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部内窩気味に開き、丸い 口唇部に至る。ほぼ球胴で最 大径中位に存す。平底。	口縁部外面密なタテハケ後ヨ コナデ、内面タテヘラ磨き。 胴部外面タテヘラ磨き、内面 工具ナデ。橙色。	床直。
壺	2	口径 12.2 胴径 19.9 底径 7.7 器高 22.4	頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部外反気味に開き、丸い 口唇部に至る。ほぼ球胴で最 大径やや下位に存す。平底。	頸部へ口縁部外面タテハケ後 ヨコナデ。口縁部内面・胴部 外面タテヘラ磨き。胴部内面 工具によるナデ。橙～浅黄橙 色。	ほぼ完存。床直。
壺	3	胴径 20.0 底径 6.0	胴部最大径下位に存す。やや 上げ底。	外面タテヘラ磨き。内面工具 によるナデ。胴部中位に丹彩 の痕跡あり。橙色。	床直。
壺	4	口径 21.0 胴径 26.7 底径 8.2	頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部外反気味に開き、平坦 な口唇部に至る。口縁部3段 の輪積痕。ほぼ球胴で最大径	口縁部下2段指頭による押 圧。最上段ヨコナデ。口縁 部内面・胴部外面ヘラ磨き・ 丹彩。胴部内面工具によるナ	ほぼ完存。床直。



第86圖 21號住居址



第87圖 21號住居址出土遺物（1）



第38図 21号住居址出土遺物（2）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	5	口径 21.0 胴径 18.8 底径 5.0 器高 18.2	中位に存す。やや上げ底。 頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部や外反気味に開き、 平坦な口唇部に至る。ほぼ球 形で最大径中位に存す。平 底。	テ。橙色。 口縁部外面指頭による押圧後 ヨコナデ。口縁部内面ヨコハ ケ後上半ヨコナデ。胴部外面 上半ヨコハケ下半タテハケ。 ハケ目はいずれも極めて細か い。胴部内面工具によるナ デ。底部木葉痕残る。淡橙色 ～赤色。	ほぼ完存。床直。
台付甕	6	口径 16.0 胴径 18.2 底径 9.1 器高 22.4	頸部2段に屈曲し、口縁部や 外反気味に開き、平坦な口 唇部に至る。口縁部2段の輪 積痕。ほぼ球形で最大径中位 に存す。脚台部内湾気味に開 く。	口縁部外面指頭による押圧後 ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴 部外面ヨコハケナメハケ整形 後下半タテヘラ磨き、内面工 具によるナデ。脚台部外面タ テハケ、内面工具によるナ デ。明赤褐色～橙色。	ほぼ完存。床直。
甌	7	口径 15.2 胴径 15.2 器高 14.2	頸部「く」の字状に屈曲し内 面に棱をもつ。口縁部や内 湾気味に開き、丸い口唇部に 至る。胴部下位で鋭く屈曲。 最大径下位に存す。	口縁部内外面ともヨコハケ 後、口唇部ヨコナデ。胴部外 面ヨコハケナメハケ後下半ナ デ。内面工具によるナデ。橙 ～にぶい橙色。	ほぼ完存。8と セッタで出土。 床直。
臺	8	口径 16.0	頸部「く」の字状に屈曲し、	口縁部内外面ともヨコナデ。	ほぼ完存。7と

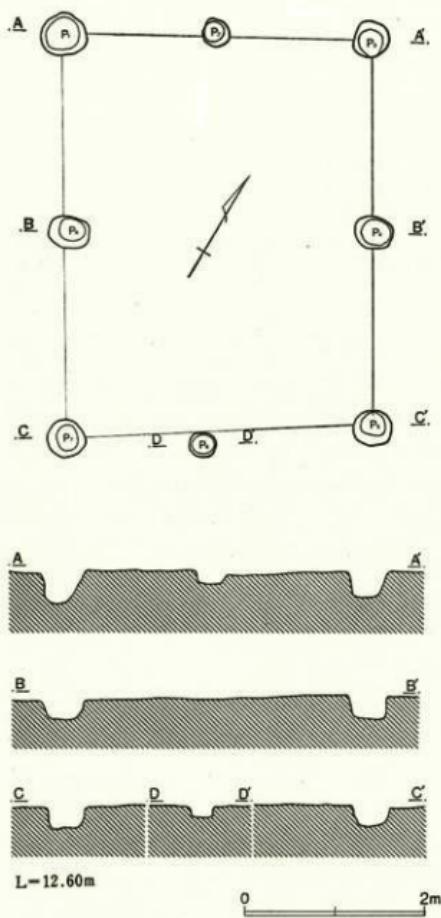
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		胴径 20.0 底径 6.8 器高 18.8	口縁部や内窓気味に開き、平坦な口唇部に至る。偏平な球洞で最大径中位に存す。やや上げ底。	胴部外面タテヘラ磨き。橙色。	セットで出土。 床直。
器台	9	口径 8.2 底径 10.5 器高 7.9	器受部内窓して開き、丸い口唇部に至る。脚台部やや内窓気味に開く。穿孔は2段3個ずつ計6孔。	内外面ともタテヘラ磨き・丹彩。口唇部ヨコナデ。脚台部内面は工具によるナデ。橙色。	ほぼ完存。床直。
器台	10	口径 8.7 底径 9.4 器高 7.9	器受部内窓して開き、平坦な口唇部に至る。脚台部やや内窓気味に開く。穿孔は2段3個ずつ計6孔。	内外面ともタテヘラ磨き・丹彩。口唇部ヨコナデ。脚台部内面は工具によるナデ。にぶい橙色。	完存。床直。
碗	11	口径 8.5 底径 3.8 器高 5.1	内窓して開き、丸い口唇部に至る。	内外面ともタテヘラ磨き。口唇部ヨコナデ。明赤褐～橙色。	完存。床直。

## 掘立柱建物址（第89図）

18号住居址の南東 8m, 19号住居址の北西 9m に位置する。2間×2間の長方形を呈する。主軸方向の桁行は  $P_1-P_7$  の心々距離で 4.5m,  $P_5-P_8$  で 4.2m, 梁行は  $P_1-P_3$ ,  $P_5-P_7$  とも 3.4m である。主軸方向は N-32°W である。柱穴の掘り形はほぼ円形を呈するが、 $P_4 \cdot P_8$  は梁行方向にやや長い梢円形を呈する。規模・深さは表示のとおりであるが、 $P_2 \cdot P_6$  の 2 個は他に比べて小さく、浅い。本建物址の近隣には住居址は存在せず、18号住居址と19号住居址の間でかなりの空間が保たれている。当然本建物址を建てるための空間と考えられ、他の住居址群と同時期と考えることができよう。

No.	径(cm)	深さ(cm)	No.	径(cm)	深さ(cm)
1	46×51	35	5	39×42	22
2	30×30	15	6	27×29	11
3	40×39	30	7	41×42	24
4	36×42	26	8	35×46	22

(藤原 高志)



第89圖 据立柱建物址

#### (4) 古墳と出土遺物

N区で、円墳址が3基検出されたい。いずれも墳丘は既に消失し、周堀址及び内部主体が部分的に残っていたにすぎない。

##### 1号墳（第90図）

3基のうち最も北に位置し、ほぼ全体が発掘区域にかかって検出された。

内部主体（第92図）は後世の擾乱によりほとんど原形をとどめず、わずかに掘形と礫床・石室の一部が確認されたのみである。石室の石材は凝灰質砂岩で、南辺で2個検出されたものの原形をとどめず、原位置から移動している可能性もある。掘形の中央やや北寄りに径1~2cmの小礫による礫床が確認された。これも原形のままでないと考えられるが、ほぼ長方形を呈し、長径1.84m、短径1.38mで厚さは5cm前後である。掘形はロームを20~30cm程掘り下げて5.9m×3.6mの不整方形プランを作り、その層序は次の通りである。

- 1 黒色土 砂岩小片・粘土を少量混入。
- 2 黒色土 1とほとんど同じだが、やや砂質に富む。
- 3 黒色土 砂岩小片・粘土塊等を極めて多量に含む。
- 4 黒色土 3とほとんど同じだが、大きな粘土塊は全くなし。
- 5 黒色土 砂岩小片・粘土等は極めて少なく、安定した土層。
- 6 小礫層
- 7 砂層 灰褐色の砂。

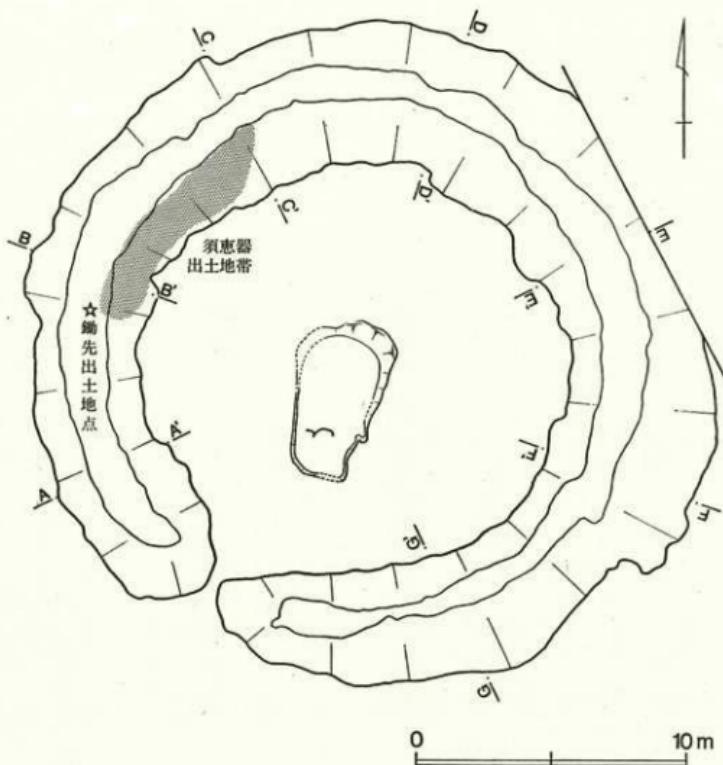
周堀は外径約25mのほぼ正円を呈し、南南西部に幅約50cmのブリッジをもつが、あとは全周する。幅3.7~5.5m、ローム面からの深さ70~115cmである。周堀の埋土の層序は次に示すとおりである（第91図）。

- 1 灰褐色土 細かい砂粒・炭化粒を含む。
- 2 黒色土 炭化物を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土
- 5 茶褐色土 ローム粒を含む。
- 6 明茶褐色土
- 7 暗茶褐色土 5層よりローム粒子が大きい。
- 8 暗黄褐色土 ローム混入。
- 9 明茶褐色土 土壌状の浅い落ち込み。

8~5層が周堀の内外から投棄された後、4・3・2層がレンズ状に堆積している。

出土遺物は内部主体から勾玉・丸玉・耳環・刀子などが、周堀から須恵器・鏡先が検出された。

勾玉（第93図1~4）はいずれも遺存状態は良好である。1は長さ3.5cm、幅1.1cm、重量11.1gで瑪瑙製、乳褐色。形状は「コ」字状を呈し、断面やや扁平な橢円形。2は長さ3.0cm、幅0.8cm、重量3.9g。瑪瑙製で明褐色。形状は「コ」字状を呈し、断面は橢円形。3は長さ3.6



第90図 1号墳全体図

cm, 幅 1.1 cm, 重量 10.8 g。瑪瑙製で黄褐色。「コ」字状を呈し, 断面はやや扁平な椭円形。4は長さ 3.0 cm, 幅 1.1 cm, 重量 7.2 g。硬玉製で暗褐色。ほぼ「コ」字形を呈し, 断面は椭円形。

九五(第93図 5~10)はいずれも硬玉製で, 色調は灰白色であるが, 風化により変化しているものもある。5は長さ 1.1 cm, 幅 1.4 cm, 口径 0.3 cm, 重量 3.1 g。両端面は平行し, 磨滅は少ない。

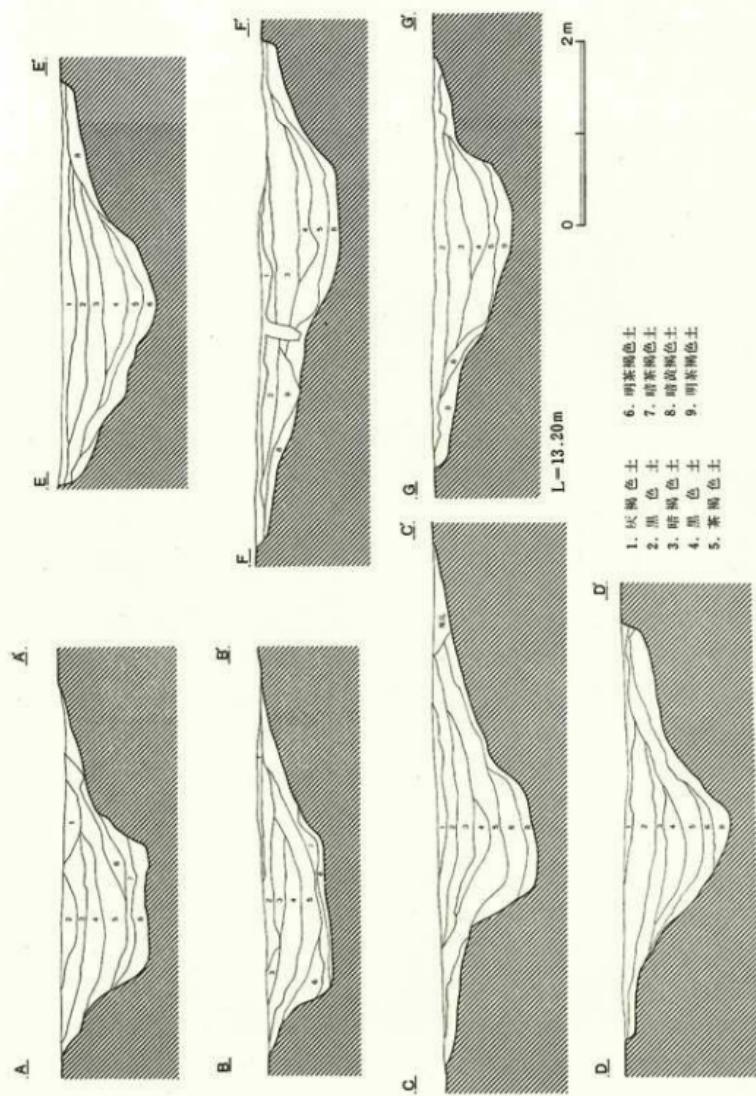
6は長さ 1.2 cm, 幅 1.3 cm, 孔径 0.3 cm, 重量 3.0 g。両端面は平行し, 磨滅は少ない。

7は長さ 1.2 cm, 幅 1.3 cm, 孔径 0.3 cm, 重量 2.7 g。両端面は平行しない。

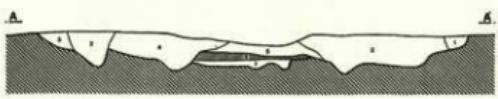
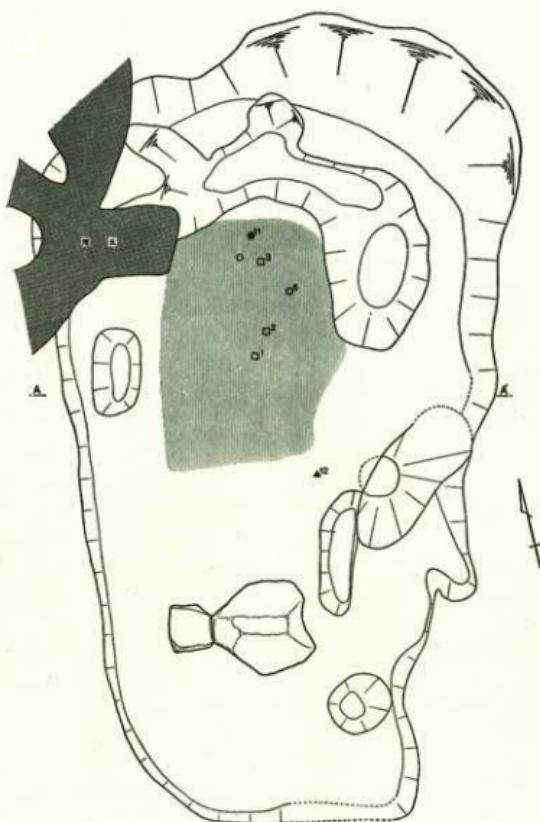
8は長さ 1.3 cm, 幅 1.5 cm, 孔径 0.3 cm, 重量 3.5 g。一方の面は玉ずれのため磨滅し凹んでいる。表面はかなり荒れている。

9は長さ 1.1 cm, 幅 1.1 cm, 孔径 0.3 cm, 重量 1.9 g。両端面は平行しない。表面はかなり荒れているため白っぽい。

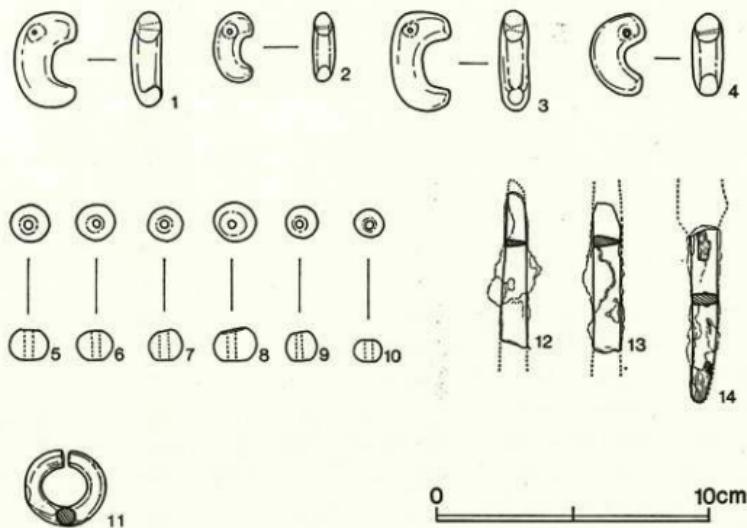
10は長さ 0.8 cm, 幅 1.0 cm, 孔径 0.3 cm, 重量 1.1 g。表面はかなり荒れている。



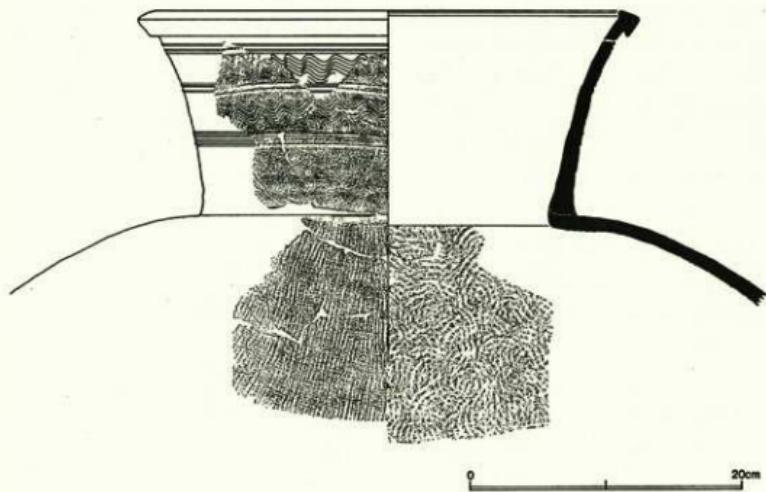
第91図 1号墳周堀土層図



第92図 1号墳内部主体



第93図 1号墳内部主体出土遺物



第94図 1号墳周縁出土須恵器

耳環（第93図 11）は環径 3.0 cm × 2.7 cm, 太さ 7.0 mm × 6.6 mm, 重量 22.7 g である。断面はほぼ円形を呈する。部分的に緑青をふくが、鍍金をよく残しており、金色の光沢をもつ。

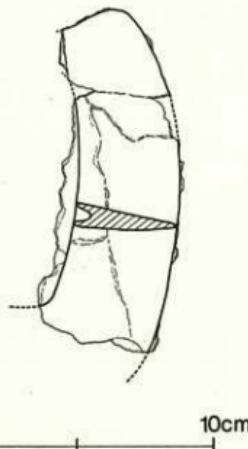
刀子（第93図 12～14）はいずれも断片であり、14 の茎部が 12 あるいは 13 と同一個体の可能性もある。12 は刃部先端付近で切矢を欠く。残存部の最大幅で刃幅 9.5 mm, 棟幅 3.0 mm, 現存長は 5.3 cm である。平棟造り。13 も切先を欠く刃部先端付近のみの残存。残存部の最大幅で刃幅 10.5 mm, 棟幅 3.0 mm, 現存長は 1.4 cm である。平棟造り。14 は刀子の茎部と思われる。全体的に木質を残し、やや反りを持つ。残存部の最大幅で茎幅 11.0 mm, 厚さ 5.5 mm, 現存長は 6.4 cm である。

須恵器（第94図）は甕の口唇部・口辺部・胴部の破片が同堀北西部の内側裾を中心に多箇検出された。図はこれらの破片から図上復元したものである。ほとんどが第5層以下から出土である。口辺部は外反して立ち上がり、段面三角形の端部に至る。頸部に3段各2条の凸線を有し、凸線間にクシ書き波状文を施す。口辺部を肩部の上にのせている。肩部は外面平行印き目、内面には同心円文が見られる。推定口径 36.7 cm。灰色。白色微砂粒を多量に含む。口唇部の形態から7世紀第1四半期のものと考えられる。

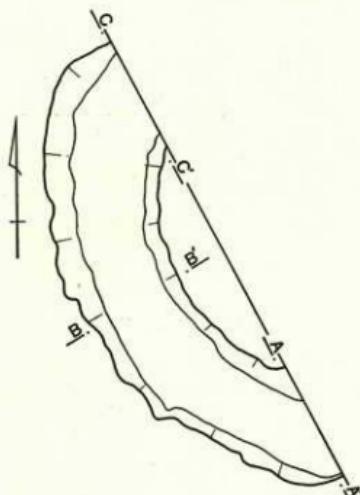
鋤先（第95図）は周堀西部の底面直上から、刃を下にしてほぼ垂直に立った状態で検出された。U字形鋤先の端部と考えられる。

#### 2号墳（第96図）

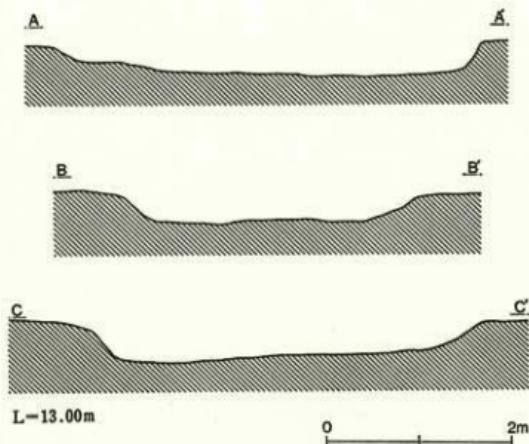
1号墳の東 6 m に位置し、周堀の一部が検出されたのみである。3号墳とは 1 m と離れていない。周堀の幅 4 m 前後、



第95図 1号墳周堀出土鋤先



第96図 2号墳全体図



第97図 2号墳周堀ニレベーション図

ローム面からの深さは 30~40cm と他の 2 墳に比べて極めて浅い（第97図）。規模は他の 2 墳と同程度と考えられる。

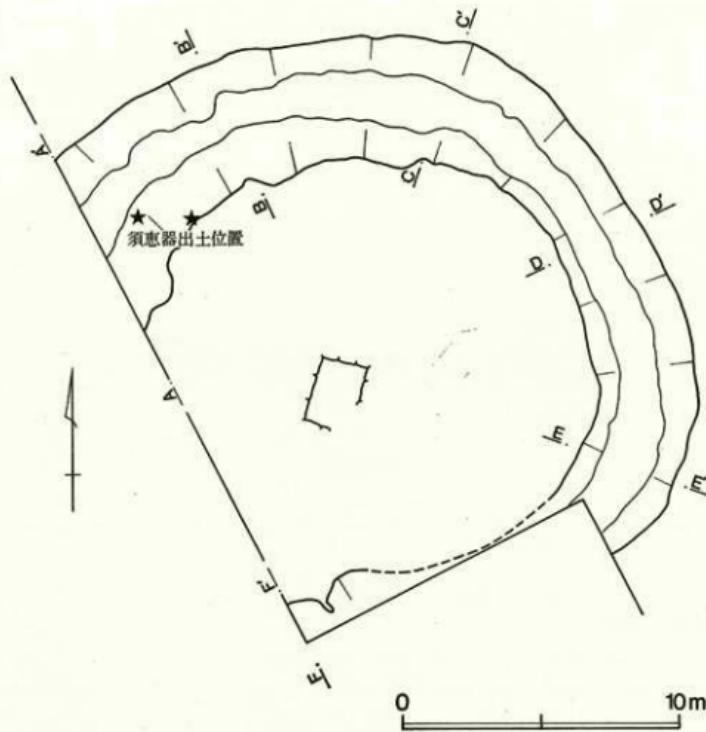
### 3号墳（第98図）

1号墳の南約4mに位置し、内部主体・周堀の一部が確認された。

石室（第100図）は南東コーナー付近が擾乱を受けているため、その全体像はつかめなかった。長方形プランの横穴式石室で、主軸方向は N-16°-E である。玄室長 2.44 m, 幅 1.76 m である。石室の石材は凝灰質砂岩で、最下段のみ遺存していたが、その上面は擾乱を受けており凸凹が激しく、高さは不明である。石材 1 個の長さは 57~87 cm, 幅 39~52 cm である。玄門部には長さ 32 cm, 幅 22 cm の樞石を設置している。玄室内は径 1~2 cm 程の小砾を厚さ 6 cm 前後に敷きつめて疊床を形成している。

周堀は調査区域内においては全周する。幅 3.0~5.0 m, ローム面からの深さは 80~120 cm である。内側は緩やかに窪む斜面、外側は緩く下った後、屈曲して急斜面となる。底はほぼ平らである。周堀の埋土の層序は以下の通りである（第99図）。

- 1 暗褐色土 表土層。
- 2 黒色土 炭化物などを多量に含む。
- 3 暗黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黒色土 しまり良し。
- 6 暗茶褐色土 炭化物・ローム粒子を少量含む。
- 7 茶褐色土 しまり悪く、全体的に粒子の粗いサクサクした土。



第98図 3号墳全体図

8 黒色土 ロームブロックを含む。

9 黄褐色土 ロームの再堆積、サラサラしてよごれている。

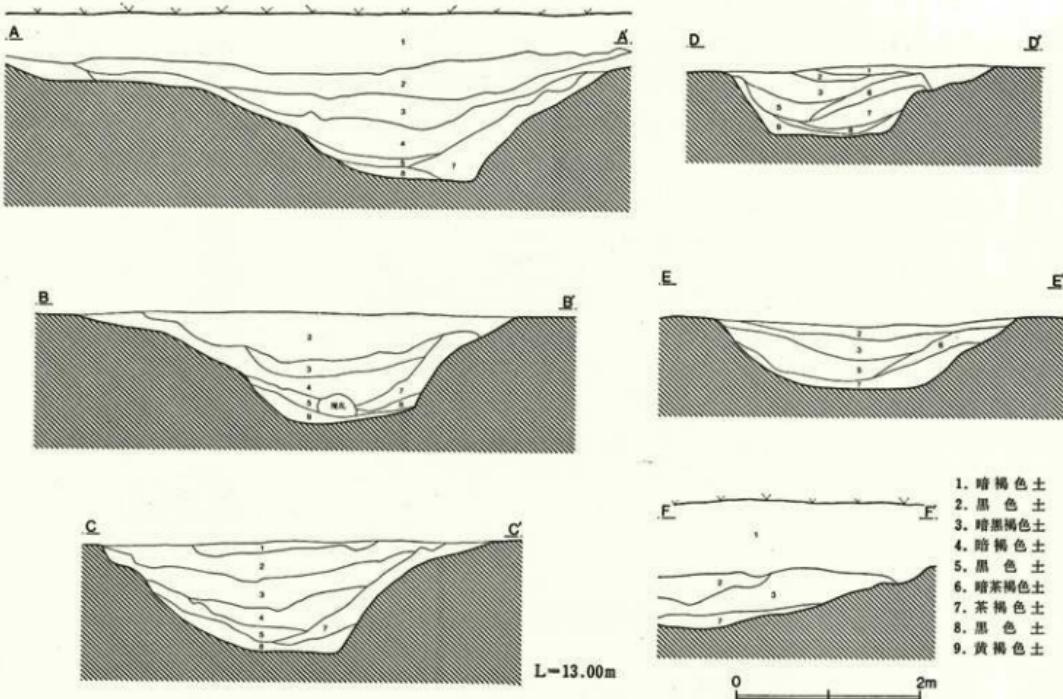
9・8層が底部近くに埋った後、外側から7・6層が、内側から5層が投げ込まれ、その上に4・3・2層がレンズ状に堆積している。

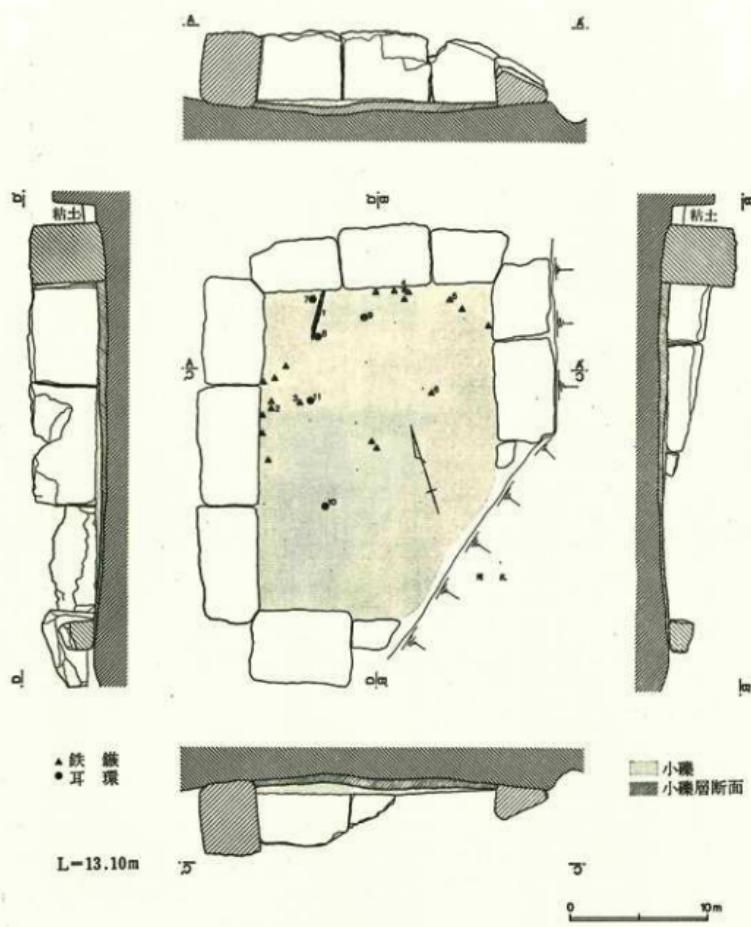
遺物は、玄室内の砾床面から鉄刀1本、鐵鎌・刀子20本、耳環5個、周掘から須恵器提瓶の破片が出土した。

鉄刀（第101図1）は玄室北西コーナー付近の砾床面上で横たわって検出された。茎先と刃部の一部が欠損するがほぼ原形をとどめており、全長36.3cm、刃長29.4cm、茎長6.9cm、刃身棟幅6.0~7.5mm、茎幅1.2~1.5cm、茎厚2.0~3.5mmである。鎌が刀身との間に木質をはさんで残っており、長さ1.4cm、幅3.0cmである。茎先付近に目釘が残っており、現存長は1.9cmである。関は両関で直角に近いものと考えられる。全体的に木質が付着するが、鎌付近及び茎部において特に著しい。

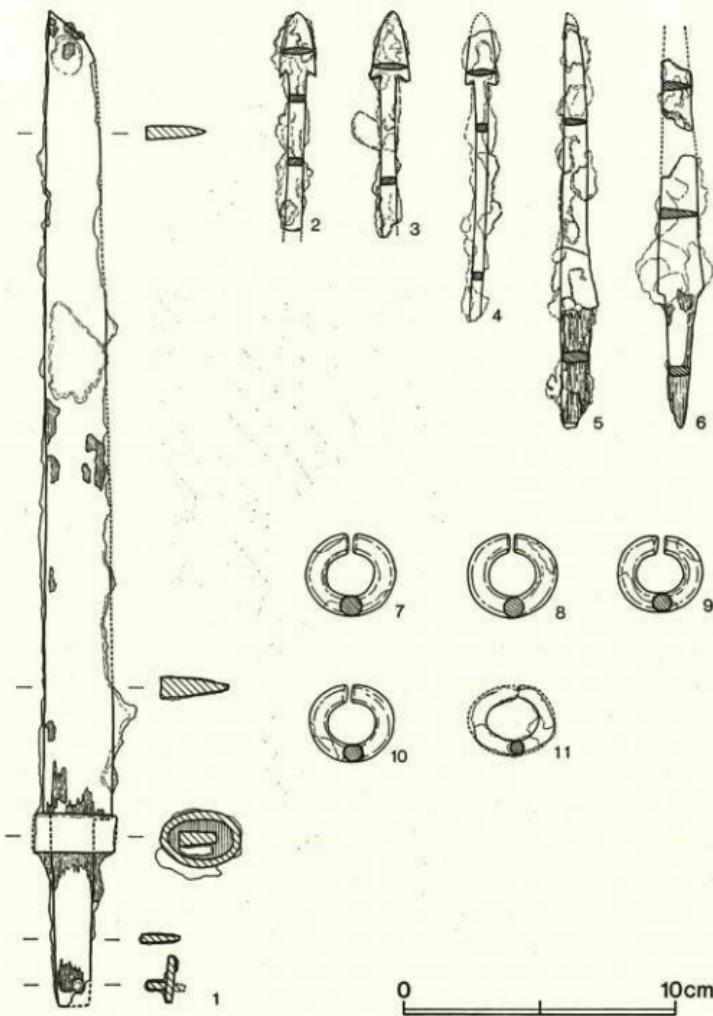
鐵鎌（第101図2~4）はいずれも有茎広鋒両丸造棘笠被頭抉三角形式で、両丸造りではあるが

第99圖 3號墳周褐色土層圖

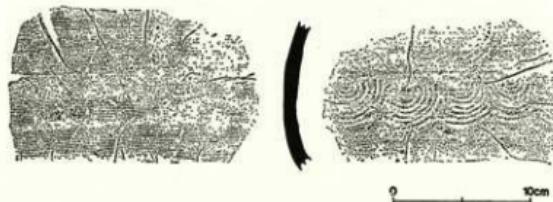




第100図 3号墳内部主体



第101図 3号墳内部主体出土遺物



第102図 3号墳周掘出土須恵器

やや扁平な断面形を呈す。笠被の有無や種類は不明であるが、4の例にみられるように、茎部がその長さにもかかわらず、細目で均一のことから、恐らく棘笠被式であると考えられる。2は現存長 7.8 cm、鎌身長 2.2 cm。茎部の断面は長方形で均一的である。腹挾は比較的浅いと思われる。3は現在長 8.2 cm、鎌身長 2.4 cm。茎部の断面は長方形で均一的である。銅化は進んでいるが、比較的よく原形をとどめている。4は現存長 10.6 cm、鎌身長は推定 2.5 cm。先端部を欠く。茎部の断面はやや長方形に近く、腐はくのためか茎部がやや彎曲している。

刀子(第101図5・6)は図示したのは2本である。5は切先を欠くが、原形をよくとどめている。関付近の刃幅は 1.6 cm、茎長 4.3 cm、推定刃長 10.8 cm、全長は 15.1 cm と思われる。平棟の片開造りで、関は直角に近いと思われる。茎部に木質を比較的よく残す。6は切先・刃部中央部を欠く。関付近の刃幅は 1.5 cm。全長は 15~16 cm であったと思われる。平棟の両開造りで、関は直角に近い。茎部に木質を残す。

耳環(第101図 7~11)は 7~10 がいずれも鉄地金銅張で、11 は鉄芯部しか残っていないが、鍍金の剥落によるものと思われる。7は環径 3.3 cm × 3.0 cm、太さ 7.5 mm × 7.0 mm、重量 25.4 g を測り、断面はほぼ円形を呈する。ごくわずかに鍍金を残すほかは、全面緑青におおわれているが完形である。8は環径 3.3 cm × 3.1 cm、太さ 7.5 mm × 7.4 mm、重量 25.0 g を測り、断面はほぼ円形を呈する。一部鍍金が剥落し、鉄地が現われている他は全面緑青におおわれているが完形である。9は環径 3.1 cm × 2.8 cm、太さ 7.5 mm × 7.0 mm、重量 21.9 g を測り、断面はほぼ円形を呈する。全面緑青におおわれているが完形である。10は環径 3.1 cm × 2.7 cm、太さ 6.5 mm × 6.0 mm、重量 22.7 g を測り、断面はやや長円形を呈する。全面緑青におおわれているが完形である。11は鍍金はすべて剥落し、鉄地のみの残存であるが比較的原形をとどめている。現環径 3.2 cm × 2.6 cm、現太さ 5.5 mm、現重量 6.0 g を測り、断面はやや長円形を呈する。現状からみて他の耳環(7~10)に近い形状のものと考えられる。

須恵器(第102図)提瓶の胴部で、周堀の内側裾部でやや離れて出土したものが接合した(第98図★印)。やや浮いた状態で検出され、第4層に伴って投棄されたものと考えられる。外面はカキ目整形、内面には同心円文が長られる。色調は灰色。胎土に白色散砂粒を含む。

(藤原 高志・鈴木 孝之)

## (5) 近世の遺構と出土遺物

### II区

溝（第103図） 10本検出された。発掘区域に添ってほぼ南北に縦走するもの（2・10号溝），それが途中で直角に屈曲するもの（1・6・9号溝），東西に走るもの（3・4・5・7・8号溝）に分けられる。このうち，1号溝北半，3・4号溝は深さ50cm前後で比較的深い。遺物はほとんど検出されず，幕末～明治初頭と思われる染付・陶磁器片，寛永通宝などがわずかに出土した程度である。これら以外の溝はいずれも浅いもので20～30cmであり，さらに新しい時期のものと考えられる。

III区 建物址1棟，井戸址1基，溝13本などが検出された。

建物址 III区北端に位置する。4間×5間の側柱式建物と考えられるが，北側と東側の柱穴は検出されなかった。棟行8.8m，梁行7.3mで，それぞれの柱穴間の心々距離はいずれもほぼ1.8m（1間）である。柱穴はいずれも重複しており，1～2回の建て替えが推察される。柱穴の深さは40cm前後である。遺物は検出されなかった。

井戸址（第107図） 建物址の北東に隣接して穿たれており，建物址に伴なうものと考えられる。径1.1～1.2mのほぼ円形を呈し，地下水位（ローム面下2.8m）まで掘り下げても底に至らなかった。覆土の層序は次の通りである。

- 1 黒色土 炭化物・焼土粒子等を含み，しまりのない土。
- 2 黄褐色土 しまりのないロームが帯状に堆積。
- 3 黒色土 水分を豊富に含み，やや粘性もある土。

遺物は内耳土器・染付の破片がわずかに出土した程度である。

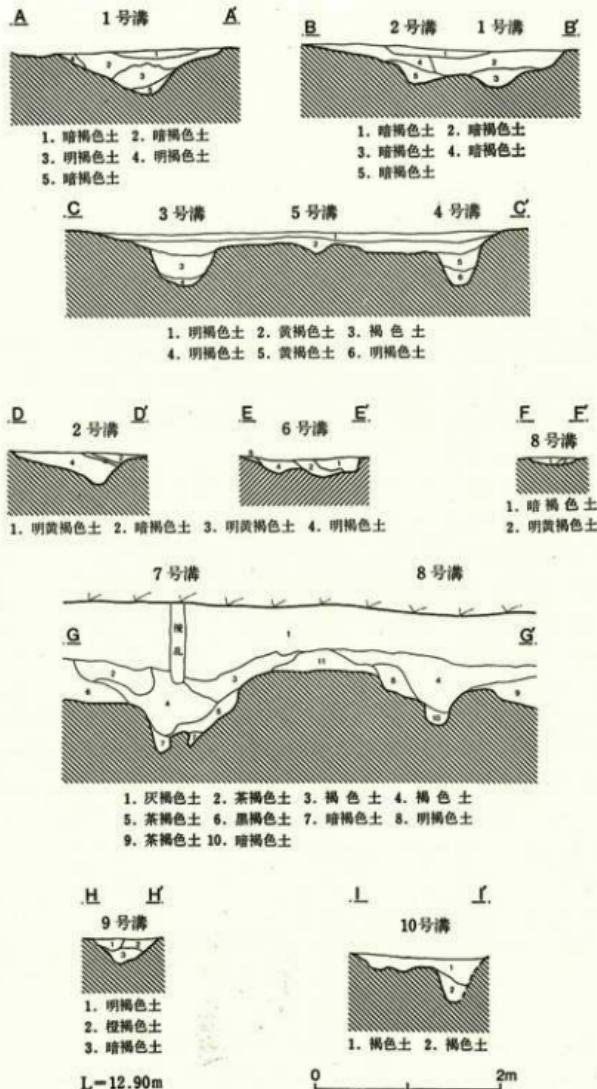
溝（第104図） 5号溝は建物址の敷地を画する溝と考えられ，建物址の北側を東西に走り，ほぼ直角に屈曲して建物址の西側を南北に走る。幅は東西溝で狭く0.7～0.8m，南北溝は比較的広く0.8～2.0mである。深さは東西溝で50cm前後，南北溝で60～70cmである。他の溝もほぼ発掘区域に平行あるいは直角に走るが，深さは20～30cmといずれも浅いものである。遺物は内耳土器・染付・陶磁器などの破片と寛永通宝が出土している。

IV区 堅穴遺構2基と溝2本が確認された。

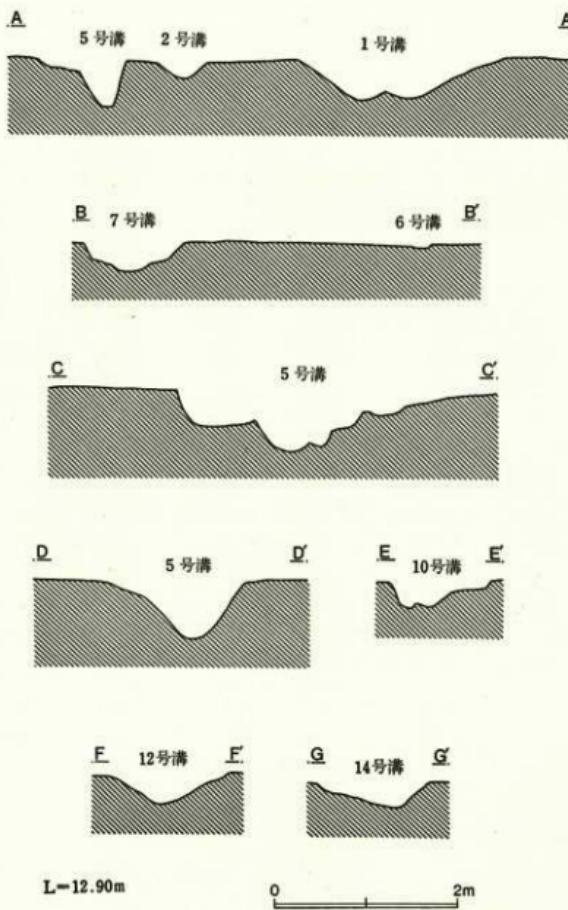
1号堅穴遺構（第105図） 2号墳の南に隣接しており，一部発掘区域外にかかる。壁は緩やかに傾斜してそのまま平坦な底部に至るが，南側では2段になっている。ローム面からの深さは約70cm。時期・性格を決定するような遺物は出土しなかった。

2号堅穴遺構（第106図） 発掘区域南端に位置する。3.0m×2.3mの南北に長い不整形円形を呈する。壁は緩やかに傾斜した後，急に下がり，底は平坦である。ローム面からの深さは北側で1.8m，南側で1.4mである。性格・時期を決定するような遺物は検出されなかった。

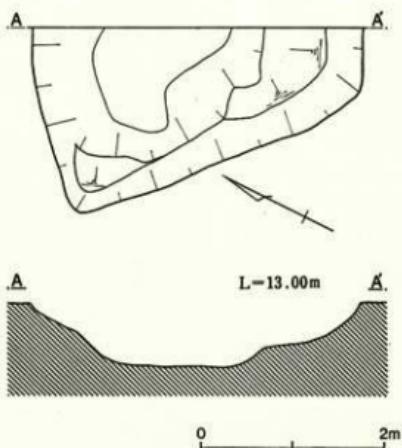
溝 IV区南端，2号堅穴遺構の北をほぼ東西に走る。2本とも幅60cm前後，深さ10cm前後



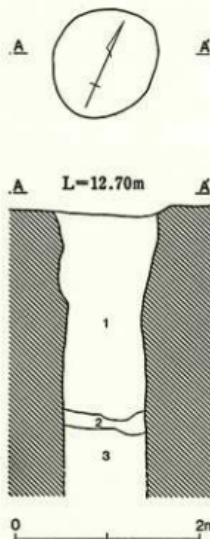
第103図 II区溝土層図



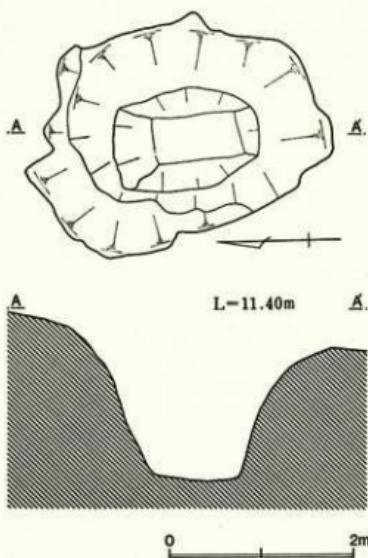
第104図 III区溝エレベーション図



第105図 1号竪穴遺構



第107図 III区井戸



第106図 2号竪穴遺構

の極めて浅い溝である。遺物は出土しなかった。

以上IV区の遺構は、いずれからも遺物が確認されなかつたが、表土層から内耳土器・陶磁器・瓦の破片が検出されたので、これらの遺構を近世のものと考えることにする。

(藤原 高志)

## 4 結 語

### (1) 野島式最古の土器群について—IV 区集中出土土器から—

さらさら遺跡Ⅳ区からまとめて検出された、胎土に若干の繊維を含む貝殻条痕文系の土器群の総数は合計 519 点で、その内訳は口縁部 50 点、胴部 463 点、底部 6 点であった。それらは、口縁部文様帶を有するものと有しないものとに大別される。前者には、多量の微隆起線ないし細隆起線による文様が構成される類と少量の微隆起線と沈線文とが組み合わさった類、沈線文のみの類が含まれ、後者には貝殻腹縁による条痕文のみが施される類と無文の類が認められる。また、口唇上には縦条体圧痕文、貝殻腹縁文、笠や丸棒状工具による刻目文を有するものも存在している。

以上の土器群を、施文具、文様、文様構成の仕方等でさらに詳細に類別すると前記したように 17 類の細別が可能であった。(第13~15類は明らかに後出的な土器群である為、ここでは除外してある) ここで、論を進める関係上、再びそれらについて簡単に触れておく。

第1類 口縁部文様帶に綫の分割ラインを基軸にした微隆起線による直線的なモチーフが描かれたもの。地文には貝殻条痕文が施される。全てが深鉢で、口縁部形態には波状と平縁の両者が存在する。口唇部は平坦に整形されており、中には丸棒状工具による刻み列の施されたものもある。器壁は全体的に若干厚手である。

第2類 器形や口唇部の整形等は第1類と基本的には同じであるが、口縁部文様帶に施される微隆起線が曲線的なモチーフや斜位のモチーフを強調して描いている一群である。器壁はやや薄い。

第3類 平縁の深鉢で、口縁部文様帶には口縁直下に横位にめぐらされた梯子状の微隆起線文が施され、そこから下に向けて梯子状の微隆起線文を主体とした文様が幾何学文を構成しているもの。平坦な口唇上には縦条体圧痕文、笠による刻み列、アナグラ属の貝殻腹縁による刺突列なども施されている。

第4類 破片からは波状の深鉢が主と推定され、口縁部文様帶に施される微隆起線文には、あたかも磨り消し効果に類似した、微隆起線の充填されない空白部分を持つものを本類とした。

第5類 第4類と基本的には類似するが、微隆起線の充填されない空白部分が曲線的に残されているもので、器壁は若干薄手である。口唇上に刻み列の付加されたものもある。

第6類 細隆起線文の施されたもの

第7類 太い沈線により幾何学文が区割され、細沈線、微隆起線が充填されるもの。

第8類 太い沈線により幾何学文が描かれ、内部に沈線あるいは細沈線が充填されるもの。

第9類 口縁部文様帶の下端には微隆起線がめぐらされ、胴部と分帶されている。文様帶内には沈線のみが観察される。

第10類 先端の鋭利な笠で口縁部に鋸齒状に沈線が充填されているもの。

第11類 微隆起線と沈線とが入れ変わったのみで文様構成等は非常に第5類と類似している。

第12類 細沈線の充填された 2 本一対の沈線により波頂部を中心に工字状の文様が施されているもの。

第16類 内外両面に貝殻条痕文が施されたもので、口唇上にアナダラ属の貝殻腹縁による斜位の刻み列が施されたものも含む。

第17類 内面は無文で、外面のみに貝殻条痕文が施されたもの。

第18類 外面は無文で、内面のみに貝殻条痕文が施されたもの。

第19類 内外両面共に無文のもの。擦痕状の痕跡あるものは本類に含ませてある。口唇上には、アナダラ属の貝殻腹縁や丸棒状工具による刻み列もみられ、刺突列が施される場合もあったようである。

第20類 底部を一括した。全て尖底であり、乳房状を呈するものもある。

以上が検出された貝殻条痕文系土器群の全てであり、表には各類土器出土点数とその保有する文様要素の有無を掲げた。

これらの土器群の器形は若干口縁が開き、途中に屈曲、段等を有せずに尖底へと移行している。第17図が典型例である。口縁は緩やかな波状を呈するものと平縁の二者があるが、その比率については破片が小さく不詳である。口唇上は大部分の土器が平坦になだらかで、断面角頭状を呈している。色調は明褐色を示すものが多く、全体的に他の織維土器に比べ白色味が強いと言える。このことは土器の胎土とも当然関係が深いのであろう。胎土には織維を若干含むが比較的堅密に焼成されている。含まれる鉱物としては、白、灰色等の石英や長石の細砂粒がやや目立つが黒色の細砂粒も含まれている。土器の成形技法は器面の凹凸から判断すると幅が約 1.5~2.0 cm の粘土紐の輪積みによることが推定される。その後、基本的には輪積み痕をとどめない位、丁寧にアナダラ属の貝殻腹縁による条痕文が口縁では横~斜方向に、胴部以下では斜~縦方向に万遍なく施文されているのである。

さて、前述したような特徴を持つ土器群はこれまで断片的には関東地方の各地で検出されていたが、量的なまとまりをもって出土したのは本遺跡が初めてであろう。その為に、これまで概略的に野島式土器の中のバラエティーとして扱われてきたようであるが、野島式でも古手に属するのではないか（横川 1971）とする見解や、野島式以前で、かつ子母口式の最も新しい段階の所産であろう（谷井 1980）と想定する意見も提出されていた。だが、微隆起線文や絡条体圧痕文等の在り方に着目すれば、いざれにしろ子母口式土器から野島式土器に関わる土器群であることに変わりはないものと思われる。

微（細）隆起線文構成の織維土器で最古のものは山内清男氏の設定した子母口式土器のなかにある（山内 1930, 同 1941）。子母口式土器の文様要素は『日本先史土器図譜』（山内 1941）を参照すれば明らかのように、細隆起線文、絡条体圧痕文、点列文、沈線文、擦痕文等があるが、小川和博氏が研究史で明らかにしたように（小川 1981）、いつしか他の文様要素は、極めて特徴的な施文効果を示す絡条体圧痕文に駆逐され、絡条体圧痕文=子母口式土器とする弊害さえあらわれるにいたっている。子母口式土器に関する困惑の度合は瀬川裕市郎、安孫子昭二両氏の決定的な見解の開き（瀬川 1982, 安孫子 1982）に、そのまま集約されているような観がある。

さて、子母口式土器の保有する細隆起線文の施される類については如何であろうか。これに関しては、岡本勇氏（岡本 1962）、安孫子氏（安孫子 1967）の研究で子母口式土器でも新しい段階にな

って採用される文様であることが明らかにされている。従って、『日本先史土器図譜』所載の子母口、大口坂両貝塚出土とされる細隆起線文の土器についても組成を含めた検討の必要性が生じていると言える。そこで、さら遺跡と近い地理的関係にあり、しかも子母口式の最も新しい段階の資料を出土した高輪寺遺跡（青木 1979）の微隆起線文の土器を中心に眺めてみようと思う。

高輪寺遺跡の微隆起線文の貼り付けられる土器は、口縁部資料によると口縁直下に微隆起線をめぐらし、口縁には縦位の絡条体圧痕文や貝殻腹縁文、刺突文を施文したり、無文のまま残されたものであり、胴部には横方向へ微隆起線が間隔をあけてめぐらされている。また、縦位に垂下されているものも若干あるようである。これらは、すべて小破片であり、全体の文様構成は不詳であると言わざるをえないが、その特徴から類推すると、勢至久保 4B 号炉穴出土土器（飯塚 1982）が想起される。さらに地域を広げると福島県竹之内遺跡（馬目 1982）で 16 類 a 種とされた土器群が酷似する。おそらく平行関係を考えてよい土器群であろう。ここで、あらためて山内氏が子母口式土器設定の当初に細隆起線による文様について「櫛木 1 にも類似の文様がある」（山内 1930）とした指摘が思い起こされる。県外では高輪寺遺跡と類似の土器群が検出された遺跡として、千葉県木の根（宮 1981）、吉田馬々台（古内ほか 1980）、復山谷（田村 1982）、茨城県安塚（橋本 1980）、常陸伏見（小野 1980）等が代表例としてあげられ、県内ではさらに中宿遺跡（安岡 1963）、宮ヶ谷塔第 5 貝塚（山形 1981）の断片資料を想定することが可能と思われる。

だが、さら遺跡の微隆起線は上記の土器群の微隆起線とは太さや施文構成において明らかに相違を示しており、より後出の所産であることが推定されよう。絡条体圧痕文や貝殻腹縁文がさら遺跡では口縁や器面に施文されることはなく、口唇上にあたかも刻目と見紛う程度の施文に退化してしまっている点もこのことを裏付けていよう。

さら遺跡の微隆起線文の土器と類似する資料は諏訪山遺跡（星間 1971）、桜山貝塚（星間 1971）、大北遺跡（小倉 1981）、舟山遺跡（谷井 1980）、多聞寺前遺跡（清水 1982）、野島貝塚（赤星 1948）、田中谷戸遺跡（川崎 1976）、ニゴダ遺跡（武部ほか 1982）等から少量ずつ出土している。このうち注意される出土状態を示した遺跡として野島貝塚と桜山貝塚をあげることができる。

野島貝塚は分層的な発掘調査がなされ、貝層は貝層下層（子母口式期）→貝層直下（子母口式期）→貝層（野島式期）→貝層直上（野島式期）という層位的な編年序列で形成されている（小川 1981）との評価が与えられている。だが、あくまで相対的に眺めればという前提が必要であり、やはり、傾向としての押えができるにとどまるのである。

こうした限界を有しているにもかかわらず、さら遺跡第 1 類（以下さら 1 類と略す）類似の土器は貝層直下と貝層中、貝層上の土器を比べると、貝層直下出土の土器の方が文様帶の幅が狭いという特徴がみられ、こうした土器群の変遷を考えるうえで参考になるものと思われる。微隆起線文の土器は貝層中が最も多く、さら 1~6 類の各種が出土し、貝層上からは 1 類と 3 類が出土している。また、微隆起線文以外の土器では、微隆起区画で内部に沈線が充填された類が貝層上でやや多めに検出されており、次の桜山貝塚貝層下土層出土土器との関係で注意しておきたい。

桜山貝塚の貝層は黒浜式土器が主体を占めているが、貝層下土層からさら 1 類と 16~17 類、19 類に概当する土器群がまとめて出土していた。また、隣接する諏訪山遺跡ではトレンチから

高輪寺段階以降野島式土器に到る各類土器を出土していたにもかかわらず、第15号住居跡からは、微隆起区画で内部に沈線を充填するもの、同一文様だが微隆起線上に刻みが付加されたもの、沈線区画で内部に沈線ないし細沈線を充填したもの、および貝殻条痕文の土器が比較的豊富に検出され、桜山貝塚貝層下土層出土の一群は全く含まれていなかったのである。

のことから、桜山貝塚貝層下土層と諏訪山遺跡第15号住居跡での事実関係と野島貝塚での土器群の時間的な傾向性を考慮するならば、さらだ遺跡の微隆起線文を有する土器群は野島式最古に位置付けられるのが現状ではふさわしいようと考えられる。そして、さら3~4類にみられる微隆起線による梯子状のモチーフや幾何学構成の文様は福島県竹之内遺跡第16類b種や轟塚C遺跡第I群2類の土器（高木 1981）、二本松遺跡IC類（石本 1982）との連動性が強くうかがえるのである。伊豆方面の清水柳遺跡（瀬川 1976）第二群B-7類、C-3類も梯子状モチーフを有する。だが、沈線化してしまっており、時期的に後出するものか、地域的な相違なのかは俄には決定しない。それは、細隆（起）線であるA類、B-1~B-4類についてもさらだ遺跡出土土器との偏差が大きく同様である。結論は今後に持ち越さざるをえないが、時間的に近い関係にあることは間違いないさうである。田中谷戸遺跡第2類の第21図6の土器も鍵になる土器であろう。

さら7類は次段階の野島式土器を考える時に参考となる土器であろう。まもなく微隆起線が区内充填に用いられることはなくなるのである。

第9類の横位の微隆起線と斜沈線の描かれた土器は、第10類の斜沈線のみの土器とおそらく同類と考えられる。こうしたモチーフの土器群は、対比するには距離が遠すぎて甚だ危険ではあるが、清水柳遺跡第二群E-3類土器との類似が指摘される。なお、清水柳遺跡例は胴部に絡条体圧痕文が横位に施文されているのであるが、さらだ遺跡例では全く不明である。もし、これらの土器群の時間的な平行関係が認められるとすれば、当然、絡条体圧痕文の土器と野島式土器との関係にも問題が派生していくことは疑いない。果たして、伊豆方面での絡条体圧痕文の土器は全く野島式土器とは関わらないのであろうか。少なくとも、ゆずり葉遺跡段階（小野 1975）以降の野島式土器と関わらないことは明確なのではあるが、南関東方面を含めた地域での資料の充実に期待したい。

第11類、第12類は系統等については全く不明であるが、施文具、手法、胎土等から当概時期の所産として位置付けておく。

以上、未だにまとまった資料の存在を聞かない土器群ではあったが、さらだ遺跡Ⅱ区出土の土器群を雜駁ながら一応野島式最古の段階の土器群として位置付けてみた。子母口式と野島式土器の間隙は子母口式最新の高輪寺段階、及び野島式最古のさら段階を介在させることにより比較的変遷がスムーズになったようではあるが、未だに埋めつくせないギャップが存在しているようを感じならない。それは何に基因しているのだろうか。高輪寺段階とさら段階との間に土器群が、未だ我々に認識されていないのか、あるいは各地域の土器群を含めた大きな動きの中で解決が図られるのか全くわからない。いずれにしろ、現段階では資料不足もあり、これらの問題には入って行けない。だが、さらだ遺跡の土器群が果たす今後の役割は大きいものと考えられる。

類別破片数及び文様要素の類別保有状況一覧表

施文部位	類別	類別																				計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	16	17	18	19	20				
口 線 部		7	2	6	2	1	1	1			1	1	1	15	2	1	7	—				50
脇 部		14	6	—	22	1	1	—	4	1	—	—	—	101	153	31	120	—				463
底 部		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
計		21	8	6	24	2	2	1	4	1	1	1	1	121	155	32	127	6				519
文様要素	類別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	16	17	18	19	20				※
口 線 部	縦条体压痕文	○																				て○印あるは保有している類に付し
脇 部	貝殻腹縫文	○												○	○							
底 部	丸棒の刻列	○													○							
口 線 部	鰐の刻列		○	○																		
口 線 / 脇 部	微隆起縫文	○	○	○	○	○	○	○	○	○												
沈 線 文									○	○	○	○	○	○								
貝殻条痕文	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○				

## 引用・参考文献

- 青木秀雄 1979「高輪寺遺跡」久喜市埋蔵文化財調査報告書
- 赤星直忠 1948「神奈川県野島貝塚」考古学集刊1
- 安孫子昭二 1967「No. 269 遺跡—縄文早期後半の土器」多摩ニュータウン遺跡調査報告B
- 安孫子昭二 1982「子母口式土器の再検討」東京考古1
- 飯塚博和 1982「半貝・倉之橋・勢至久保」遺跡調査会報告第1冊 野田市遺跡調査会
- 石本 弘 1982「5. 二本松遺跡」吹き地区遺跡分布調査報告Ⅱ 福島県文化財調査報告書第104集
- 岡本 勇 1962「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」横須賀市立博物館研究報告(人文科学)第6号
- 小川和博 1981「子母口式土器についての観察(1)」なわ第19号
- 小倉 均 1981「大北遺跡」浦和市遺跡調査会報告書第15集
- 小野真一 1975「ゆずり葉」加藤学園考古学研究会
- 小野真一 1980「常陸伏見」伏見遺跡調査会
- 川崎義雄 1976「田中谷戸遺跡」町田市田中谷戸遺跡調査会
- 清水比呂之 1982「多聞寺前遺跡I」多聞寺前遺跡調査会
- 瀬川裕市郎 1976「清水柳遺跡の土器と石器」沼津市歴史民俗資料館紀要1
- 瀬川裕市郎 1982「子母口式土器再考」沼津市歴史民俗資料館紀要6
- 高木和夫 1981「猪塚C遺跡」阿武隈地区遺跡分布調査報告Ⅰ 福島県文化財調査報告書第98集
- 武部亮光ほか 1982「エゴダ遺跡」山武考古学研究所
- 谷井 広 1980「舟山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集 埼玉県教育委員会
- 田村 隆 1982「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」財団法人千葉県文化財センター
- 橋本 勉 1980「安塚遺跡」鹿島線関係遺跡発掘調査報告書
- 古内 茂ほか 1980「吉田馬々台遺跡—縄文早期炉穴址群の調査一」印旛村教育委員会

- 宮 重行 1981 「木の根」財団法人千葉県文化財センター  
馬目順一 1982 「竹之内遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊  
安岡路洋 1963 「岩槻市鹿室中宿発見の櫛文早期末葉の土器」埼玉考古第1号  
山形洋一 1982 「宮ヶ谷塔第5貝塚」大宮市遺跡調査会報告第5集  
山内清男 1930 「関東北における鐵雜土器・追化第3」史前学雑誌第3卷第3号  
山内清男 1941 「日本先史土器圖譜第VII輯」  
横川好富・星間存次 1971 「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡」埼玉県遺跡調査報告第8集 埼玉県遺跡調査会

## (2) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構について

ささら遺跡では該期の遺構としては、堅穴住居址 21軒と掘立柱建物址 1棟が検出された。

堅穴住居址はすべて隅九方形を呈する。大きさは 8 号住居址の 6.5m × 5.3m が最大、13 号住居址の 3.3m × 3.1m が最小であり、特別に大きいものも小さいものもない。

堅穴住居址の構成要素としては、壁溝・炉・主柱穴・貯蔵穴があげられる。これらの有無を表にすると右のようになる。表の中で空白の部分は不明なものである。主柱穴は 3 個以上確認できたものを○、1 個以下のものを×とした。また 20 号住居址の貯蔵穴は柱穴の可能性もあるので△にしておいた。21 軒の住居址のうち、先の構成要素をすべて備えているのは 8・9・15・18・21 号住居址の 5 軒のみである。他の住居址は、4 要素のうちいずれかが欠けているが、その欠陥のし方に規模性は認められない。ただし炉は、不明の 3 軒を除いてすべての住居址が所有している。

堅穴住居址の主軸方向は、凡例で述べたように炉と貯蔵穴の位置から算出した。ほとんどの住居址が N-25°～58°-W の範囲におさまるが、13 号住居址 (N-67°-E)、7・9 号住居址 (N-6°-W) の 3 軒はこの範囲からはずれる。13 号住居址は炉が東に寄っているためにこのような数値になったが、これと垂直の方向を主軸方向と考えると N-23°-W で、他の住居址とほぼ近い値をとる。7・9 号住居址の 2 軒は主軸方向が等しく、他の住居址の平均値とは隔たっている。しかもこの 2 軒の住居址は 6m 弱しか離れておらず、何らかの関係が予想される。このような類例としては、16 号住居址 (N-55°-W) と 18 号住居址 (N-58°-W)、20 号住居址 (N-47°-W) と 21 号住居址 (N-45°-W) の 2 例があげられる。16・18 号住居址の距離は 5m 強、20・21 号住居址は約 7.5m である。後者は 19 号住居址 (N-41°-W) も加えて 3 軒で 1 グループとなる可能性もある。発掘区域が幅約 25 m と狭長なため明言はできないが、これら以外の住居址も、発掘区域外の住居址とともに 2～3 軒単位でグループを構成する可能性が考えられる。この 2～3 軒のグループが、同時存在したものか、あるいは住居の移設によるものかは、今後の課題である。

掘立柱建物址は、18 号住居址と 19 号住居址のほぼ中間に位置する。この 2 軒の堅穴住居址の間は約 22m、該期の遺構がなく、他の住居址のあり方と様相を異にしている。また掘立柱建物址の主軸方向は N-32°-W であり、堅穴住居址でこれに近い値をとるものも多い。以上 2 点から、掘立柱建物址は、堅穴住居址群と同時に機能していたと考えて大過ないであろう。

ささら遺跡堅穴住居址一覧表

住居址	大きさ(m)	主軸方向	壁溝	炉	主柱穴	貯蔵穴
1	5.2 × (6.2)	N-25°-W	×	○	○	○
2	3.8 × 3.6	N-31°-W	×		×	
3	× 4.5	N-30°-W	○	○		
4		N-27°-W	×			
5	3.8 ×	N-34°-W	○	○	×	
6	3.2 ×	N-26°-W	○	○	×	
7	4.4 × 4.7	N-6°-W	×	○	×	○
8	6.5 × 5.3	N-45°-W	○	○	○	○
9	3.8 × 4.6	N-6°-W	○	○	○	○
10	4.3 × 3.9	N-26°-W	×	○	×	○
11	4.5 ×	N-31°-W	○	○	×	○
12	3.1 × 3.7	N-29°-W	○	○	×	○
13	3.3 × 3.1	N-67°-E	○	○	×	×
14	2.8 ×	N-44°-W	○	○		
15	4.1 × 3.7	N-31°-W	○	○	○	○
16	3.5 × 4.4	N-55°-W	○	○	○	×
17		N-47°-W	○			
18	5.2 × 5.1	N-58°-W	○	○	○	○
19	4.2 × 5.0	N-41°-W	×	○	×	○
20	3.4 × 3.4	N-47°-W	○	○	○	△
21	4.5 × 4.1	N-45°-W	○	○	○	○
掘		N-32°-W				

なお、II区の北側は急傾斜をなして低地に移行し、南側は台地が続くもののIII区以南に該期の遺構がないことから、本集落は発掘区域内に関する限り、II区で終結していることがわかる。

### (3) 弥生時代末～古墳時代初頭の土器について

ささら遺跡では、住居址から、壺・甕・高杯・器台・塊・瓶などの器種が出土している。これらは形態・製作手法などにより、いくつかに類別することが可能である。以下では、これらを大宮台地周辺の遺跡と比較しながら検討してみたい。

#### 壺形土器

本遺跡から出土した壺形土器は多種多様にわたるが、形態・製作手法などから4類に大別される。

A類 二重口縁のものである。13住-1, 15住-1, 19住-1が該当する。13住-1は複合部が短か

く、胸部はほぼ球形を呈し、本遺跡周辺では諏訪山遺跡 5 号住（註 1）、砂ヶ谷戸 II 遺跡（註 2）、尾山台遺跡 A1-10 号住（註 3）などに類例が見られる。15 住-1 は馬込七番第 1 遺跡 2 号住（註 4）、薬師耕地前遺跡（註 5）で類例が見られる。19 住-1 は口縁部が内凹する特殊な器形で、尾ヶ崎遺跡 10 号住（註 6）に類例が見られる。

なお 15 住-3 は肩部及び口縁部内面に繩文帯が巡り、当類に属すると考えられる。肩部に繩文帯をもつものとしては、馬込七番第 2 遺跡 2 号住、円正寺遺跡（註 7）、西台遺跡（註 8）、中里前原遺跡 8 号住（註 9）、前耕地遺跡（註 10）、吉野原遺跡 8 号住（註 11）、下加遺跡 4 号住（註 12）、銀治谷遺跡 1 号方形周溝墓（註 13）などに類例が見られる。

また、7 住-1 は有段口縁であり、諏訪山遺跡 5 号住、西台遺跡 3 号住などに類例が見られる。

**B 類** 直口縁のものである。頸部の屈曲のし方により 3 種類に細分される。

**B<sub>1</sub>** 体部から緩やかに彎曲して口縁部に至るもので、1 住-1、2 住-1 が該当する。芝原遺跡（註 14）に類例が見られる。

**B<sub>2</sub>** 頸部が 2 段に屈曲するもので、8 住-1、15 住-2、21 住-1 が該当する。馬込七番第 2 遺跡 2 号住、西原遺跡 40 号住（註 15）などに類例が見られる。

**B<sub>3</sub>** 頸部が「く」の字状に屈曲するもの。21 住-2 が該当し、平林寺遺跡 11 号住（註 16）に類例がある。

また 6 住-1 は頸部に凸帯が巡り、棒状工具による刻み目が施される特殊な器形で、諏訪山遺跡 35・39 号住に類例が見られる。また刻み目はないが、頸部に凸帯が巡るものとしては小室天神前遺跡 3 号住（註 17）にもある。

**C 類** 広口壺である。7 住-3、13 住-6、14 住-2、16 住-1、21 住-4・8 が該当する。このうち 21 住-4 は口縁部に 3 段の輪積痕を残し、壺形土器としては稀有名な例と言えよう。

**D 類** 小型壺で、1 住-7、8 住-6、18 住-5 が該当する。このうち 1 住-7 の類例は、尾山台遺跡 A4-1 号住、後遺跡 3 号住（註 18）、西台遺跡 1 号住、平林寺遺跡 11 号住などに見ることができる。

### 変形土器

変形土器には台が付くものとそうでないものの 2 種があるが、ここではひとまとめに捉えて、口縁部の形態・製作手法により 3 大別することにする。

**A 類** 口縁部に輪積痕を残すもの。9 住-1、18 住-3、19 住-2、21 住-5・6 が該当する。頸部は 21 住-6 のみ 2 段に屈曲するが、他は「く」の字状に屈曲する。類例を周辺の遺跡に求めると、馬込七番第 1 遺跡 1 号住（註 19）、同第 2 遺跡 1 号住、諏訪山遺跡 36・40 号住、尾山台遺跡 A1-9・A3-4・A4-1 号住、楽上遺跡 9 号住（註 20）、吉野原遺跡 1・15 号住、南原遺跡方形周溝墓（註 21）などで見ることができる。なお 18 住-3 は口唇部に刻み目が施されており稀有名な例である。

**B 類** 口唇部に刻み目を施すものである。3 住-2、8 住-2・4、13 住-3、16 住-3 が該当する。頸部は 8 住-4、13 住-3 が彎曲、他は「く」の字状に屈曲する。口唇部に刻み目を施した例は周辺の遺跡で多数見ることができる。馬込七番第 1 遺跡 1・3 号住、西原遺跡 33・40・46 号住、馬込遺跡（註 22）、小室天神前遺跡 2・4 号住、円正寺遺跡、尾山台遺跡 A1-10・A3-4・A4-1 号住、砂ヶ谷

戸II遺跡、楽上遺跡2・3・5・11号住、尾ヶ崎遺跡11号住、高台山遺跡1号住(註23)、秩父山遺跡10・15号住(註24)、後遺跡1号住、中里前原遺跡5・6・8・12号住、大宮公園内遺跡6・7号住(註25)、前地耕遺跡1・4号住、本村遺跡2・4号住・A溝(註26)、西台遺跡1号住、吉野原遺跡5・8・12号住、薬師耕地前遺跡1・3号住・方形周溝墓などである。

**C類** 素口縁のものである。2住-2、3住-3、6住-2、8住-3、13住-2、15住-4・5・6、16住-4が該当する。このうち13住-2は頸部が2段に屈曲し、他と異なっている。またハケ目による調整は口縁部外面がタテ～ナナメ、同内面がヨコ、胴部上～中位がヨコ～ナナメ、胴部下位～脚台部がタテというのが一般的であるが、15住-4は口縁部～胴部下位までナナメハケが施されている。また、6住-2は胴部下半にヘラ磨きが、15住-6、16住-4は口縁部外面にヨコナデが施されている。

#### 高环形土器

坏部の形態により2類に大別される。

**A類** 坏底部に稜を持たず、そのまま脚台部になだらかに移行するもの。坏部の彎曲のし方により2種類に細分できる。

**A<sub>1</sub>** 坏部の彎曲が緩やかで外上方に大きく開く。10住-5があてはまる。この形態は馬込七番第1遺跡4号住、新田口遺跡1号住(註27)、馬込遺跡に見ることができる。

**A<sub>2</sub>** 坏部が大きく彎曲するもので、5住-1、13住-5が該当する。楽上遺跡6・7号住、諏訪山遺跡41号住、大宮公園内遺跡に同様のものがある。

坏部の彎曲のし方は不明であるが、12住-4、16住-6も**A類**にあてはまる。

**B類** 坏底部に稜をもつものである。脚台部の形態により3種類に細分される。

**B<sub>1</sub>** 脚台部がほぼ直線的～やや外反氣味に開く、該期の高环の一段的な形態である。13住-4が該当する。吉野原遺跡6号住、西台遺跡1号住、大宮公園内遺跡、大山遺跡B4号住(註28)、楽上遺跡11号住、尾山台遺跡A3-4号住、諏訪山遺跡41号住、平林寺遺跡11号住などに同様の形態の高环を見ることができる。

**B<sub>2</sub>** 脚台部がやや内彎氣味に開く。8住-5があてはまり、この形態は東海地方欠山～元屋敷式に類似する。周辺地域に類例を求めるれば、吉野原遺跡6号住、尾山台遺跡A3-4号住などが指摘できる。

**B<sub>3</sub>** 脚台部が大きく外反するもの。16住-10は坏部の形態が不明であるが、おそらく当類に該当するものと推察される。吉野原遺跡7号住、西台遺跡5号住、馬込7番第1遺跡6号住に類例を見ることができる。

なお、高环形土器のうち特殊なものとして16住-9があげられる。吉ヶ谷系の土器と考えられ、砂ヶ谷戸II遺跡1号住に類例が見られる。ただし砂ヶ谷戸II遺跡の例は口縁部の段が3段であるのに対し、本例は5段であり、しかも最下段の直下に2個1組の小突起を有する点が異なっている。

#### 器台形土器

器受部の形態により3類に大別される。

**A類** 器受部が直線的に開く。5住-2が該当する。周辺の遺跡では、馬込7番第1遺跡5号住、

諏訪山遺跡 40・41 号住、稻荷台遺跡 11 号住（註 29）、秩父山遺跡 15・20 号住、西台遺跡 3 号住などに類例が見られる。

**B 類** 器受部が彎曲して開く。16 住-12, 21 住-9・10 が該当する。馬込七番第 1 遺跡 4 号住、諏訪山遺跡 29・34・38・40 号住、尾ヶ崎遺跡 10 号住、稻荷台遺跡 2 号住に同様のものがある。

**C 類** 器受部が屈曲して外面に稜をもつもの。13 住-6 が該当する。馬込七番第 1 遺跡 7 号住、尾山台遺跡 A3-4 号住、西台遺跡 1 号住などに類例がある。

#### 壺形土器

**A 類** 底部から口縁部まで内窪して立ち上がる。13 住-7, 18 住-6, 21 住-11 が該当する。手捏土器の 13 住-7 以外は、丁寧なヘラ磨きを行なっている。この形態の壺は、後遺跡 1 号住、秩父山遺跡 20 号住、高台山遺跡 1 号住、尾ヶ崎遺跡 11 号住、稻荷台遺跡 2・8 号住、楽上遺跡 6 号住、尾山台遺跡 A 1-9, A 1-10 号住、諏訪山遺跡 5・41 号住、西原遺跡 44 号住などで見られる。

**B 類** 口縁部が外反するもので、7 住-4, 12 住-5 が該当する。いずれも外面にハケ目を残す。薬師耕地前遺跡、下加遺跡 4 号住、吉野原遺跡 5 号住、本村遺跡 A 溝、後遺跡 1 号住、稻荷台遺跡 8・10 号住、楽上遺跡 1 号住、諏訪山遺跡 6 号住などに類例が見られる。

#### 籠形土器

21 住-7 の 1 例のみである。頸部で屈曲し、口縁部が肥厚している。頸部が屈曲する例としては小室天神前遺跡 4 号住、新田口遺跡 1 号住などに、口縁部が肥厚する例としては本村遺跡 2 号住などに見られる。

註 1 埼玉県遺跡調査会『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』1971

註 2 桶川市教育委員会『砂ヶ谷戸 I・II 遺跡・楽上遺跡』1977

註 3 埼玉県『新編埼玉県史 資料編 2』1982

註 4 蓼田市教育委員会『馬込七番第 1・2 遺跡』1982

註 5 上尾市教育委員会『薬師耕地前遺跡』1978

註 6 註 3 と同じ

註 7 浦和市『浦和市史 第 1 卷 考古資料編』1974

註 8 桶川町教育委員会『西台遺跡の発掘調査』1970

註 9 中里前原遺跡調査会『中里前原遺跡 第一次発掘調査報告書』1980、与野市教育委員会『中里前原遺跡 第二次発掘調査（B 地点）』1981

註 10 青木義脩「浦和市駒場・前耕地遺跡の弥生式土器をめぐって」『埼玉考古 第 8 号』1970 埼玉考古学会

註 11 大宮市役所『大宮市史 第一巻 考古編』1968

註 12 大宮市教育委員会『下加遺跡』1965、註 11 と同じ

註 13 戸田市教育委員会『殿治谷・新田口遺跡』1969

註 14 青木義脩・高山清司「浦和市三室芝原遺跡発掘調査報告」『埼玉考古 第 11 号』1973 埼玉考古学会

註 15 日本道路公団・埼玉県・埼玉県遺跡調査会『加倉・西原・馬込・平林寺』1972

- 註 16 註 15 に同じ
- 註 17 伊奈町天神前遺跡調査会『小室天神前遺跡』1981
- 註 18 埼玉県立文化会館『後遺跡』1962
- 註 19 註 4 に同じ
- 註 20 註 2 に同じ
- 註 21 戸田市教育委員会『南原（高知原）遺跡第1次発掘調査概要』1969
- 註 22 註 15 に同じ
- 註 23 大宮市教育委員会『高台山遺跡調査報告』1970
- 註 24 上尾市教育委員会『秩父山遺跡』1978
- 註 25 註 11 に同じ、埼玉県立博物館『埼玉県立博物館紀要—2』1976
- 註 26 埼玉大学考古学研究会『鳳翔 4号 埼玉大学構内本村遺跡第1次発掘調査報告』1967
- 註 27 註 13 に同じ
- 註 28 埼玉県教育委員会『大山』1978
- 註 29 上尾市鶴荷台遺跡調査会『上尾市鶴荷台遺跡』1979

#### (4) 古墳について

IV区で円墳址が3基検出され、周堀及び内部主体から遺物が出土しているので、これらをもとに古墳の年代について考えてみたい。

1号墳は、周堀はほぼ全体が検出されたが、内部主体は後世の擾乱を激しく受けている。凝灰質砂岩を使用した横穴式石室と推察されるが、形態等は不明である。遺物は、内部主体から勾玉・丸玉・耳環・刀子等が、周堀から須恵器甕、鋏先が出土した。このうち年代を決定できるものは須恵器甕で、口唇部の段面形が三角形を呈することから、7世紀第1四半期のものと考えられる（註1）。

3号墳の内部主体は比較的よく残っていた。凝灰質砂岩の切石を使用した長方形プランの横穴式石室で、主軸方向はN-16°-Eである。南東コーナー付近が擾乱を受けているため、全体像はつかめなかつたが、右偏側の片袖形になると考えられる。玄室長2.44m、幅1.76mで、片袖と考えた場合の玄門幅1.05mである。これは高麗尺（1尺35cm、6世紀代～7世紀代）の整数倍に非常に近い値である。すなわち244cm=35cm×7尺（=245）、176cm=35cm×5尺（=175）、105cm=35cm×3尺である。

内部主体から鉄刀・鉄鎌・刀子・耳環などが検出されている。鉄刀は刀身及び茎が比較的短かく両開式であることから、7世紀代のものと考えられる（註2）。鉄鎌はいずれも有茎広鋒両丸造鎌首被勝抜三角形式で、両丸造りではあるがやや扁平な断面形を呈する。6世紀後半～7世紀前半のものと考えられる。

2号墳からは遺物の出土を見ず、年代は不明である。しかし、3墳とも埴輪を持たず、また上述した遺物の年代などから、7世紀前半の近い時期のものと推察される。

IV区の南側は緩斜面をなして低地に移行し、北側は台地が続くものの、該期の遺構は存在しないので、発掘区域に関する限り、古墳群の南北端は確認できたことになる。

(藤原 高志)

注 1 酒井清治氏の御教示による

注 2 瀧瀬芳之氏の御教示による

IV

帆 立 遺 跡

## 1 遺跡の概観

帆立遺跡は、元荒川の右岸に面する大宮台地岩槻支台上に位置している。調査区北側と南側に小さな谷があり、遺跡の所在する台地は北東側に突き出る形となり、海拔の最高位は14.6m(調査区内では13.4m)を測る。南北側の谷を挟んだ対岸の遺跡(馬込新屋敷遺跡・ささら遺跡)および台地東側の縁辺部の遺跡(八番遺跡)では、多くの遺構が検出されているが、今回の調査で検出された遺構は、縄文時代前期の土壙2基、中世の溝1条、時期不明の土壙4基である。中世の溝からは捕鉢・内耳土器・土師質土器皿・陶磁器・石臼・板碑・鉄製品等の出土があり、溝は台地中央を北東→南西方向に通る。なお、調査面積は約5,700m<sup>2</sup>、遺跡の基本土層は、次の通りである。

1. 暗褐色土でしまりがない。(20~30cm)
2. 褐色土、擾乱が多く、1層と3層が混入する。3層とは明瞭な境を持たず漸移する。(0~20cm)
3. ソフトローム層。(10cm)
4. 黒色帶。3層のソフトローム層との間にハードローム層を挟まず、5層より濃い。(30cm)
5. 黒色帶。(20cm)
6. 黄橙色ローム層。

## 2 発掘調査の経過(日誌抄)

10月9日 表土の除去を始める。天候不順な日が多く10月29日まで続ける。

10月29日 遺構の確認作業を北側から始める。

10月30日 調査区に沿って10m間隔の格子目(Grid)を作り、北側から整数、東側からアルファベットで呼称する。

11月5日 表土の除去だけでは擾乱が多く、遺構の確認が不可能なので、Grid内に更に2×2mの方眼を組み、部分的に掘り下げを行う。

11月7日 B-6区に諸式土器を含む土壙を検出(5号土壙)し、遺物出土状況の写真撮影を行う。

11月17日 A-12区からC-13区にかけて溝が検出され、付近を全面的に掘り下げる。C-5・6区に土壙を検出(1号土壙)し、断面図を作成する。出土遺物は無し。

11月19日 溝の掘り下げを始める。石臼・板碑等出土し、中世末期の溝と判明する。

11月20日~27日 溝出土遺物の写真撮影、土層断面図作成、5号土壙断面図作成。

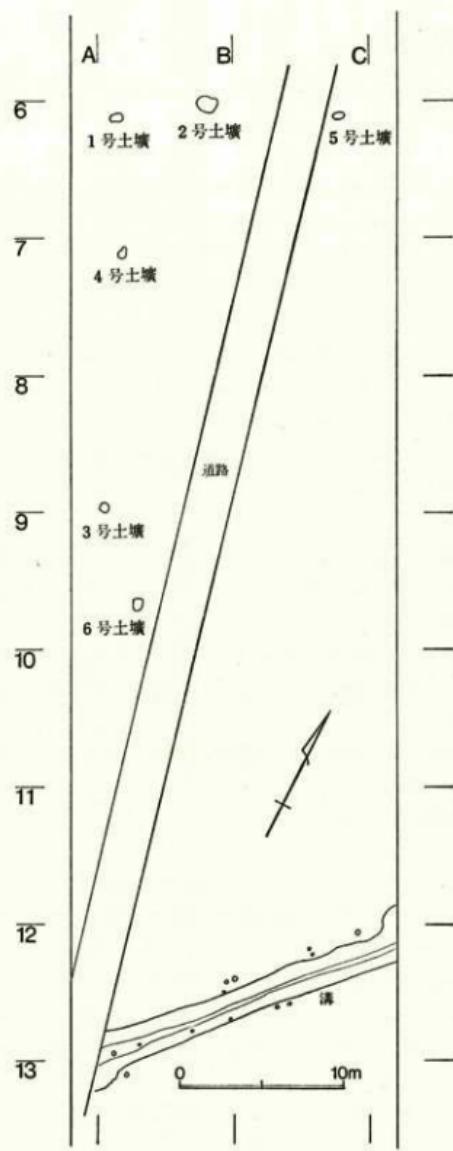
11月28日 溝付近にピット検出。4号土壙検出。

12月2日 溝平面図作成、写真撮影。

12月3日 1・2・3号土壙写真撮影、平面図作成。

12月5日 4・6号土壙写真撮影。4・5・6号土壙平面図作成。

(宮 昌之)



第108図 航立遺跡全測図

### 3 遺構と出土遺物

#### (1) 遺構

##### 溝（第109図）

A-11・12区、B-12区、C-12・13区に位置する。北東方向から南西方向に低くなり、D-13杭を起点にみれば、軸方向はN-43°-Eである。溝の幅は上面において最少 1.84 m、最大 3.22 mを測るが、確認面での幅であり、本来はより太いと考えられる。下面の幅は判断に迷うが、20 cm~90 cmである。深さは確認面から1 m~1.7 mを測り、断面形はV字形に近い逆台形を呈するが、底面はやや曲線となる。北東側には擾乱が入り、本来の壁を残していない。

覆土はやや複雑で、5か所の土層断面図を作成したが、連続する層が少ない。

溝底面に2か所、壁面に2か所、外部に10か所のピットが検出された。断面形は不整であるが、溝周辺部でのみ検出されており、関連する施設と考えられる。

出土遺物は多く、土師質土器皿（カワラケ）、陶磁器、擂鉢、内耳土器、板碑、石臼、磁石、鉄製品、鐵滓、馬歯等が出土している。

##### 1号土壤（第110図）

C-5・6区に位置する。上幅は1.55 m×1.15 m、深さは37 cmを測り、平面形は不整な梢円形を、断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなし。

##### 2号土壤（第110図）

C-6区に位置する。上幅は90 cm×70 cm、深さは32 cmを測り、平面形は不整な梢円形を、断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなし。

##### 3号土壤（第110図）

C-9区に位置する。上幅は70 cm×65 cm、深さは24 cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなし。

##### 4号土壤a・b（第110図）

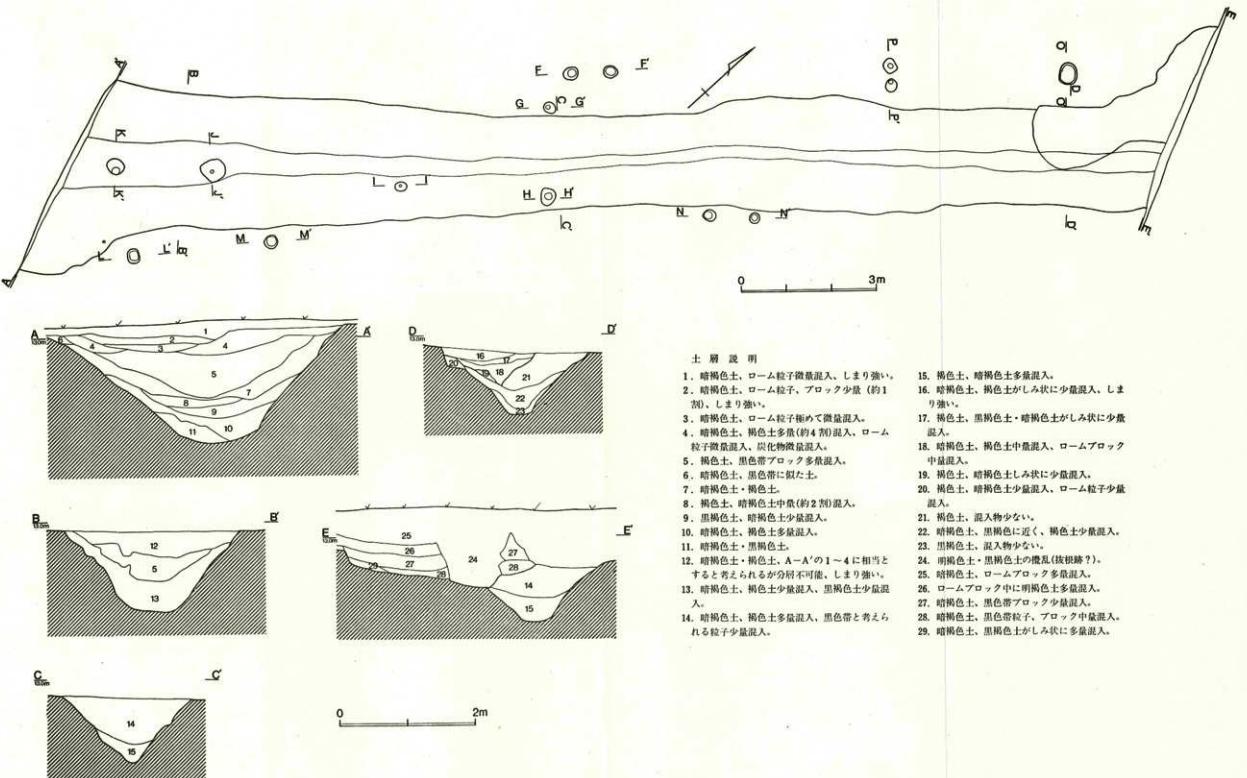
C-7区に位置する。土壤の重複があり、古い方をa、新しい方をbとした。aピットは推定上幅50 cm、底径10 cm、深さ60 cmを、bピットの上幅は95 cm×80 cm、深さは45 cmを測る。平面形は梢円形を、断面形は一方に片寄る逆台形を呈する。出土遺物は縄文時代末葉の土器と礫である。

##### 5号土壤（第110図）

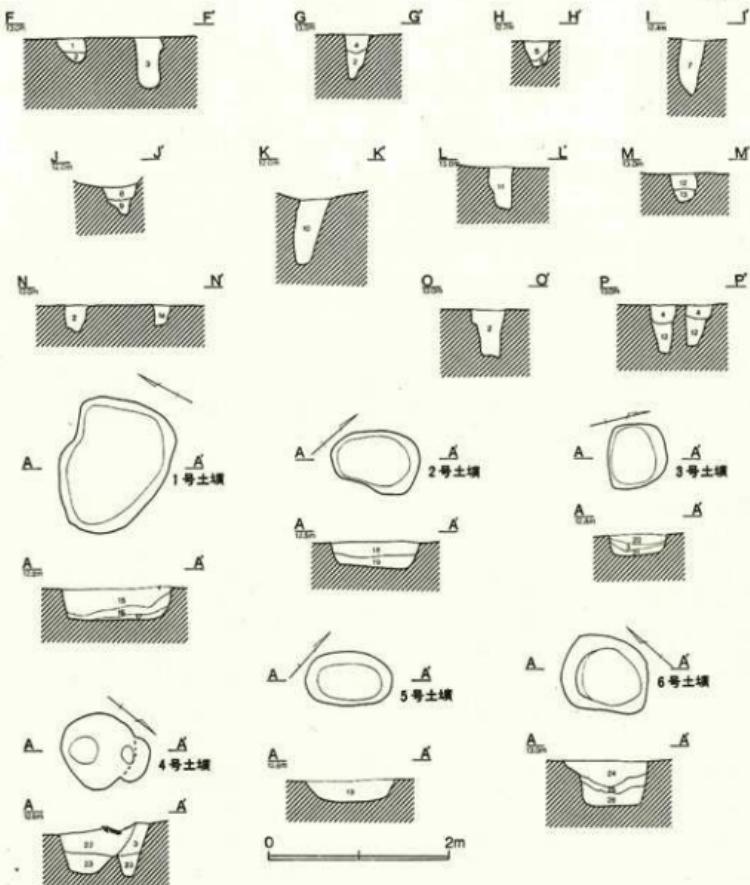
B-6区に位置する。上幅は1 m×60 cm、深さ25 cmを測る。平面形は梢円形で、断面形は皿状を呈する。遺構上部は消失している。出土遺物は縄文時代前期諸種式土器が出土している。

##### 6号土壤（第110図）

C-6区に位置する。上幅は95 cm×82 cm、深さ48 cmを測る。平面形はやや不整な隅丸方形で、断面形は逆台形を呈する。覆土中に焼土を含有する。



第109図 溝平面図・土層断面図



## 土層 説明

1. 棕褐色土・暗褐色土・黒褐色土  
中量(約2割)混入。
2. 棕褐色土・暗褐色土多量(約4割)混入。
3. 棕褐色土・混入物少なく粘性がある。
4. 棕褐色土・暗褐色土。
5. 棕褐色土。
6. 棕褐色土・黒褐色土。
7. 棕褐色土・ローム粒子少量・黒褐色土中量混入。
8. 棕褐色土・暗褐色土・しまり弱い。
9. 灰褐色土・粘性がある。
10. 黑褐色土・ロームブロック・粒子中量混入・しまり弱い。
11. 暗褐色土・褐色土少量(約1割)混入・しまり弱い。
12. 暗褐色土・褐色土多量混入。
13. 暗褐色土・混入物少く・しまり弱い。
14. 暗褐色土・ロームブロック・粒子中量混入・褐色土中量混入。
15. 棕褐色土・炭化物少量混入・ローム粒子少量混入。
16. 暗褐色土・ロームブロック・粒子少混入。
17. 暗褐色土・ロームブロック・粒子多量混入。
18. 明褐色土・暗褐色土・ローム粒子少量混入・やや粘性有り。
19. 暗褐色土・混入物少ない。
20. 黑褐色土・明褐色土少量・ローム粒子少量混入。
21. 暗褐色土・混入物少なく粒子が粗い・機械にしまりなし。
22. 暗褐色土・褐色土少量混入・粘性あり。
23. 黑褐色土・黒味強く・混入物少ない。
24. 赤褐色土・焼土ブロックに掘土色多量に混入。
25. 明褐色土・焼土粒子少量混入・ロームブロック少量混入・ややしまりなし。
26. 棕褐色土・焼土粒子少量混入・ロームブロック中量混入・ややしまりなし。

第 110 図 溝開削ビット土層断面図、土壤平面図・土層断面図

## (2) 遺物

### 石器（第111図）

1. ポイント、石質は安山岩で風化が激しく、先端部を大きく欠損しており基部も新傷痕が見られる。このような槍先形尖頭器は単独出土の例が多く、時期や器種組成がわかりにくかったが、最近の調査において徐々にではあるが良好な遺跡に恵まれ明らかになりつつあると言える。多摩蘭板遺跡第4文化層、前田耕地遺跡がその例として上げられるが石質に安山岩が多いという共通性があり興味深い。

2. 石鏃、石質は安山岩製で重さは1.6g。
3. 石鏃、石質は黒曜石製、両脚を同一方向から欠損している。
4. 石核、石質は黒曜石、重さ26.1gである。表面に4条の剥離痕があり、打面は表面剥離痕の稜線に対し直角に再生を行なっている。90°打面転位も見られ残核の形状はサイコロ状になっている。

（西井 幸雄）

### 縄文時代

#### 第1群土器（第113図1）

縄文時代草創期の撚糸文系の土器である。器面には継位の  $R\{L$  繩文が回転施文されている。色調は灰褐色を呈しており、胎土には白色の粒子及び砂粒が混入されている。焼成も良好である。

#### 第2群土器（第113図2）

早期前半の沈線文系土器である。棒状工具による斜位の沈線が交互に施されている。器厚は5mmと薄手であり、色調は灰褐色を呈し、胎土、焼成は共に良好である。堅緻な土器である。

#### 第3群土器（第113図3～6）

早期後半の貝殻条痕文系土器群を一括する。3は、断面三角形の細隆起線が直線的に幾何学的な構図を描くものである。細隆起線上には、竹管状工具による三日月形の刺突が加えられている。4は、細い棒状工具による沈線区画が幾何学的なモチーフを作り、区画内は集合沈線で充填している。沈線区画上には、円形刺突が加えられている。3・4の裏面には、条痕がほぼ横位に走っている。5・6は、表裏両面に右下りの条痕が施文されている。色調は、4・5が明るい褐色、3・6が灰褐色を呈している。胎土には若干の繊維が含まれるが、焼成も良好で堅緻である。

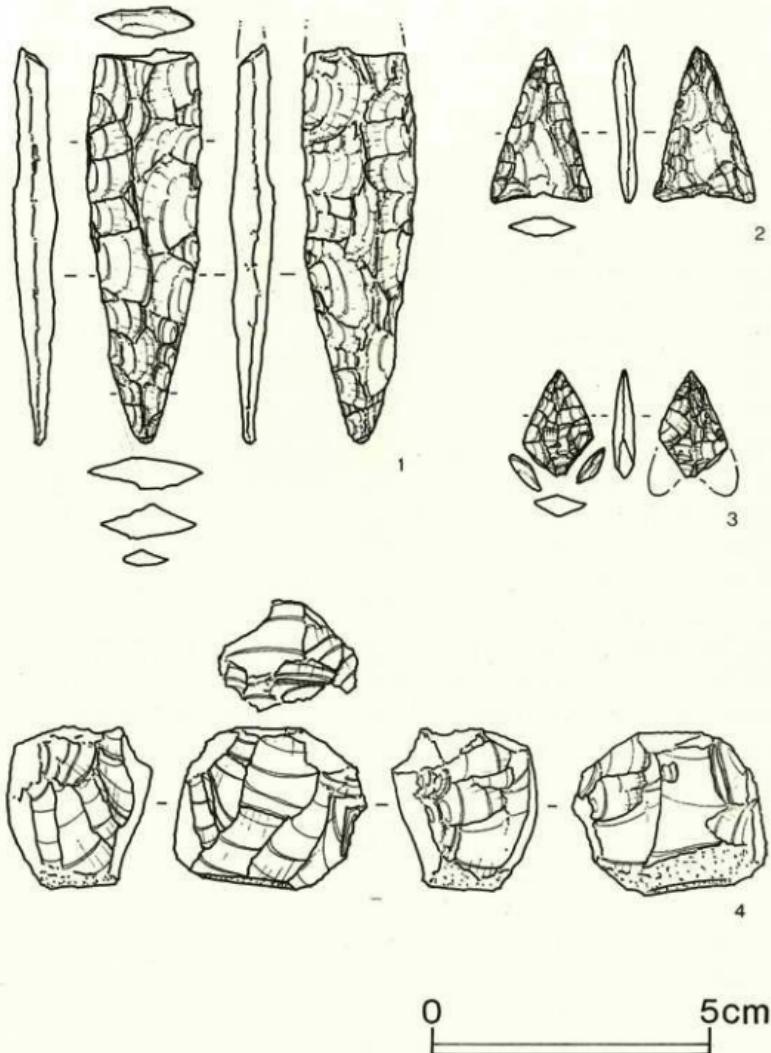
#### 第4群土器（第113図7～31）

前期初頭の繊維を含む土器群を一括する。

#### 第1類（第113図7・8・13・18）

関山式土器に比定される。7は、内削ぎ状口縁を呈している。地文を持たず、半截竹管による平行沈線になる渦巻文と、鋸歯状文のモチーフから成り、瘤を有している。8は、口縁部に1cmほどの無文帶をおき、以下、末端がループ文による  $R\{L$  と  $L\{R$  の斜繩文が施されたものである。13～18は、胴部破片である。13・14は、0段3本の羽状繩文とコンバス文が施されている。15は6段にわたりループ文が施文され、上下にコンバス文が付くものである。18は、

$L \left\{ \begin{matrix} R \\ L \end{matrix} \right.$  と  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ R \end{matrix} \right.$  の羽状縄文である。色調は、13~15 は、内面が黒色を、表面が明褐色を



第 111 図 帆立遺跡出土石器

呈している。16は灰褐色、17は黒褐色、18は茶褐色を呈している。いずれもよく整形が行なわれている。

第2類（第113図9～12、19～31）

黒浜式土器に比定されるものである。9は、口縁部が平坦に切られている波状口縁の土器である。数条の爪形文が斜位に施文されるものである。10は、横走する平行沈線内に深い爪形文が施文されている。11は、内削ぎ状口縁を呈しており、口縁部に無文帯を有し、以下は荒いR{Lの斜繩文によるものである。12は、先端部が尖りぎみの口縁を呈する。器面には、R{Lの斜繩文が施文されるが、器面が荒れているため明瞭でない。19・20は、半截竹管によ

る平行沈線で、羽状のモチーフを作るものである。地文は無文である。21は、竹管状工具により横方向に押引いたものである。器厚は5mmと薄い。22～31はすべて繩文の土器である。30は原体0段多条によるR{Rの、31は原体、R{Rの繩文によるものである。胎土には纖維を多量に含み、いずれも色調は、灰褐色～黒褐色を呈している。いずれも多種類による繩文が施されている。22～24は、施文がきちんと行なわれているため関山式とも思われるが、他は、繩文がみだれているため、当段階の土器と考えられよう。

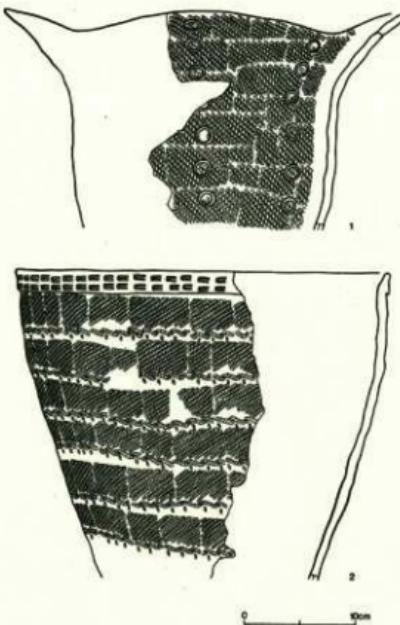
第5群土器（第112図1、第113図32～43、45、46、第114図50～53）

前期後半の土器群を一括する。胎土には纖維を含まず、白色粒子及び砂粒を含む。色調は黄褐色～褐色を呈している。

第1類（第112図1、第113図32～43、第114図50～53）

諸磽式に比定される。

第112図1は、口縁が大きく外反する深鉢形土器であり、4単位を呈すると思われる波状口縁の土器である。原体R{Lの繩文を地文とし、波頂部及び波底部に円形竹管文が垂下する土器である。口径（推定）36cmを測る。胎土には少量の砂粒を含み、色調は明褐色を呈する。5号土壠より



第112図 帆立遺跡出土繩文土器（1）